



くぬぎ台駅前  
商店街

himeuzu

姫烏頭

尾尺

くぬぎ山は、武蔵野台地のはずれに半島のように突き出した小高い丘陵である。

雑木林に覆われたその山裾からは、武蔵野台地の下を流れる伏流水が流れ出している。昔くぬぎ川と呼ばれたその流れは、今は暗渠となって遊歩道の下を流れている。その遊歩道をずっと辿っていくと、くぬぎ台駅前商店街へ出ることができる。中部鉄道のくぬぎ台の駅を中心に、くぬぎ台駅前商店街は広がっている。多くの商店街が苦境に立たされている昨今では、なかなかがんばっている商店街である。

太平洋戦争でも空襲をまぬがれたここには、結構古い店も残っている。郊外型スーパーマーケットの進出で客を奪われたり、後継者がおらず店を畳んだりした店舗もあることにはあるが、ここ駅前商店街にはまとまった広さの土地が確保しづらいこともあって、大型店の出店とは無縁だった。今も個性的な店を中心に客が付いている。中でも有名なのは餅菓子屋の辰巳堂だ。名物は何と言っても大福。これを目当てに開店前から行列ができる。わざわざ電車に乗って遠くからやってくる客もいるほどだ。それから、肉のマルセイ。ここの『爆弾メンチ』は辰巳堂の大福と並ぶ当商店街の名物である。まんまるい形のメンチカツは、国産牛肉100%。大振りに切った玉ねぎのみじん切りが入って、飛び切りジューシーな味わいが大人気。地元産の里芋で作った『もちりコロッケ』も最近評判を呼んでいる。これまた行列が延々と続くのだ。

長谷川さんは、その商店街で理髪店を営んでいる。戦前から続く古い理髪店である。店舗は先代が建てた古いままの、いわゆる看板建築と呼ばれる建物で、馴染みの客を相手に今も細々と営業を続けている。

くぬぎ台団地という大規模団地を擁するくぬぎ台の町には、かつては子どもたちがあふれるほどにいたのだが、今ではその団地からみんな巣立ってしまい、団地に残ったのは老人ばかりである。団地に隣接して開店した大型スーパーも、ついには不採算店舗となり数年前に撤退を余儀なくされた。大勢の卒業生を送り出してきたくぬぎ台小学校も大半の教室が使われなくなって、今は老人たちが『お達者くらぶ』のサークル活動などをする場所として提供されている。

くぬぎ台小学校の空き教室を利用して開設される運びとなっているもうひとつの事業が、『学童しにあくらぶ』（略称：しにあくらぶ）である。『しにあくらぶ』は、学童クラブを卒業した子どもたちと老人のふれあいのための事業で、老人が子どもの頃に覚えた技などを子どもたちに伝授しながら、ふれあいの時間を持ってもらおうという企画なのである。（このあたりの事情は拙著『くぬぎ山ものがたり』に詳しい。）

『しにあくらぶ』の講師は、『お達者くらぶ』のサークルのひとつである体操教室のメンバーを中心に構成されている。長谷川さんもその一人で将棋を担当することになっているが、このたびひょんなことから地元の大地主、林一族の一員である伝衛門さんも参加することになった。この伝衛門さん、なかなか侮れない老人で、どうも秘密の作戦があるようだ。

小学校で開かれた『しにあくらぶ』の作戦会議のあと、伝衛門さんは長谷川さんに同行して駅

前商店街へ向かった。長谷川さんはいつも歩いて来るので、伝衛門さんも自転車を押して隣を歩いている。愛用のヘルメットは背中のデイパックの中だ。普段なら長谷川さんは、同じ駅前商店街の面々である山田畳店のご隠居や井上写真館のご主人と一緒に帰ってくるのだが、伝衛門さんから耳打ちをされて今日は別行動を取っている。

二人の歩く遊歩道沿いにはずっと桜並木が続いている。この桜は以前、くぬぎ川を暗渠にしたときに植えられたもので、その当時はまだほんの若木であったが、今では周囲に根を張り立派な大木に成長している。桜の間には、楓やミツバツツジ、それに野鳥が種を運んだものかウメモドキ、マユミ、ウグイスカグラなど様々な灌木も交じって四季折々に美しい姿を見せ、木々の間からは野鳥のさえずりも漏れてくる。ところどころにベンチなども配され、区民の憩いの場となっているのだ。この時期、桜にはまだ少し早い、枝先のつぼみがそろそろ膨らみ始めて花の季節が近いことを告げている。灌木から芽吹き始めた新緑は、緑色の小さな篝火（かがりび）のようだ。

「へえ～総帥（そうすい）はいつも自転車なんですか」

『総帥』というのが伝衛門さんの通称である。

「左様。いつもは図書館裏の駐輪場に停めておるのです」

くぬぎ台図書館は、暗渠となった昔のくぬぎ川を挟んでくぬぎ台小学校に隣接している。その辺りには遊歩道は作られておらず、元の川沿いに灌木などが茂って、そこに川の流れたことが窺わせている。小学校から図書館へ行くには、そこにかかる小さな橋を歩いていく。その図書館には、伝衛門さんの孫の悦子さんが司書として働いているのだ。

「なるほどね。すいませんね、歩きにつきあわせちゃって」

「なんのなんの。我輩からお願いしたのでござる。徒（かち）も時にはよいもの。殊にこの桜並木。昔、くぬぎ川の流れたときにはヒヨロヒヨロの若木でしたがな……。今ではこのような大木となっておる。月日の経つのは早いものですなあ……」

伝衛門さんが桜の梢を見上げて感慨深げにつぶやく。

「川がなくなってから何年くらい経つかなあ……。相当前ですよ」

「左様。あの頃既にくぬぎ川はどぶ川のごとき有様でしたからな」

「いろんなものが捨てられたりしてねえ。結構臭かったですよ」

「高度経済成長期の只中で、世に公害問題などが喧伝され始めた頃ですな。当時は近頃のように、環境に配慮するなどということが一切考えられておりませんでしたからなあ。嘆かわしき限りでござる……」

「ほんとにねえ。私なんかもガキの頃はよくくぬぎ川で遊んだもんですよ。その頃はまだ川もきれいでねえ……。川に入って魚を掴まえたり、土手の数珠玉（じゅずだま）やオナモミなんか取ったりね」

『数珠玉』とは、水辺に生育するイネ科の植物で、実が数珠の玉に似ていることからこう呼ばれる。子どもたちがこの実に糸を通して数珠にしたり、ネックレスのようにして遊ぶのである。『オナモミ』は実に鋭いトゲが生えており、その実は衣服、特に毛糸のセーターなどによくくっつくので、子ども同士で投げあって相手にくっつけたりして遊ぶ。同様に遊ぶ『イノコヅチ』とともに、昔の子どもには恰好のおもちゃであった。

「数珠玉やオナモミとは懐かしいですなあ……。イノコヅチはまだ時々見かけるが、オナモミはもうあまり見かけません。今ではそんなもので遊ぶ子どももおらぬようになってしまった」

「今の子どもはゲームばかりですからね」

「左様。しかしながら、今ではこの風景もしっかりと辺りに馴染んで、良い景観を作っておりますな」

「ほんと、ここを歩くの、結構楽しみなんです。季節が感じられてねえ。これで川の流れが復活すれば最高なんですけどね」

「うむ……。じゃが、これだけ桜が根を張っておると、掘り返すのも難しいかもしれませんな」

「なるほどねえ……。小学校の裏の方は、森本先生のお陰で大分自然が戻ったらしいですが」

「おお、例の蛍の先生ですな」

「そうそう。今年辺りから私らにも見せてくださるらしいですよ」

「そうらしいですなあ。楽しみ楽しみ。実はウチの孫も、その蛍復活には一枚噛んでおりましてな」

「あ、聞きましたよ。図書館にお勤めの傍ら、先生の助手をされてるんでしたね。何でも、第一助手とか」

「いやいやいやいや……」

伝衛門さんが目の前で手を振る。

「第一助手だなどとは本人が勝手に言っておるだけで、果たして役に立っておるのやら」

「そんなことないでしょう」

「この孫が、誰に似たのかおかしな娘（こ）でしてな……」

「そうなんですか」

「左様。何やらもう、おかしなことばかりやっておりまする」

「へええ～楽しそうなお孫さんですねえ」

図書館にはあまり用事のない長谷川さん、林さんの名は聞いて知っているが会ったことはないらしい。

「おお、大分花のつぼみも膨らんできましたなあ」

伝衛門さんが、目の先に腕を伸ばした桜の枝を見ながら言う。

「ほんとです。楽しみだなあお花見が」



「左様ですな」

「ところで総帥、今日の用件というのは、散髪じゃありませんよね」

「ふっふっふっ……その通り。先だって作戦会議で申し上げた件の打ち合わせを……」

「やっぱり！ そうじゃないかと思ったんです。ほんとにあの髪型でしにあくらぶにおいでになるおつもりで？」

「御意。毎回というわけではではござらんが、時によりあの髪型で登場したいと考えております」

あの髪型というのは……。『総帥』の名の由来ともなっている『リンデン総帥』の髪型を指す。伝衛門さんは、作戦会議の最中にこっそりリンデン総帥の写真を長谷川さんに見せ、このような髪型にするにはどれくらいの髪の長さが必要か尋ねたのである。それを聞いた長谷川さんには伝衛門さんの意図が分からない。聞けば、何とその髪型で『しにあくらぶ』に出る計画だというのだ。びっくりしたのは長谷川さんである。既に七十歳を超した伝衛門さんが、こんな髪型を！？

リンデン総帥は人気ロックグループ『地獄の軍団』のリーダーで、またの名を『林伝衛門』と称する。何と、あろうことか伝衛門さんと同姓同名である。リンデン総帥は大の相撲好きとして知られ、相撲解説の折など音楽活動以外の場面では『林伝衛門』を名乗っている。伝衛門さんも大の相撲好き。あるとき、HNKの相撲トークのような番組を観ていた伝衛門さん、「我輩は……」などと相撲について熱く語る怪しい白塗りの人物を画面の中に発見する。何と！

出演者の字幕には『林伝衛門』の文字。それからというもの、伝衛門さんはリンデン総帥がいたく気に入り、他人の気がしないらしく、家族には「以後わしのことは『総帥』と呼ぶように」とのお達しが。自分のことを『我輩』と呼んでいるのである。

「髪型だけではありませんぞ」

「ええっ？」

「貴殿はご存じないかもしれんが、あの写真のリンデン総帥とおっしゃるお方は日本版ヘビーメタルの旗手でしてな」

「へびーめたる？ そりゃ何です？ あの人、相撲解説者じゃなかったんですか」

ロックなどにトンと縁のない長谷川さんには、何のことだかさっぱり分からない。

「左様。相撲解説者は世を忍ぶ仮の姿。本来はロックバンドの総帥であらせられる。ヘビーメタルと申すはイギリスを発祥の地とする過激なロック音楽の一ジャンルで、率いておられるバンドはその日本版でござる」

「へえ……何だかよく分からないけど、そうなんですか」

ますますちんぷんかんぷんの長谷川さん。

「顔面には歌舞伎の隈取のような、悪魔的とも言われる特殊なメイクを施しましてな」

「なるほど。あの写真もちよっとそんな感じでしたね」

「髪の毛は爆発したような、まさに『怒髪天を突く』といったような趣で。先日お目に掛けた写

真などはまだおとなしい方でござる。色は金色でござったが、他にも赤、青、緑、紫などなど」

「へええ～そりゃまた」

「コスチュームに至りましてはな、皮製のジャケット、手袋、ベストやパンツに、鎖、鉾などを多用し、マントなども着用。足元はブーツで決める。頭には時に王冠や羽飾りの帽子を被ることもござる。加えて首輪、腕輪、指輪の類（たぐい）もじゃらじゃらと」

リンデン総帥に惚れ込んだ伝衛門さん、いろいろと研究を重ねたらしい。

「・・・・・・・・あの、総帥、まさかそういう服装も考えておられるので？」

「御意」

「ひええ～っ！ 本気ですか！？」

これまでの長い床屋人生でいろいろな人に接してきた長谷川さんも、呆気にとられている。

「無論でござる。我輩は人を楽しませることを旨といたしておりましたな」

「う～ん、そこまでやりますか！」

ここまで聞いた長谷川さんは確信した。お孫さんはきっと総帥にそっくりなのだ！

「何事にも全力投球。本日はその髪型の予行演習ということで・・・・・・・・」

「いや参りました。あ、そろそろ家ですよ」

二人の行く手には、古色蒼然たる長谷川理髪店が姿を現した。何しろ戦前からの建物である。優に八十年を超える歴史を刻んでいる。軒に掲げた看板は、何と右から左に書いてある。電話番号だけは塗り直して左から書いてあるが、局番は昔の三桁のままである。普段は家の近くの理髪店に通う伝衛門さん、長谷川理髪店を間近に目にするのは今日が初めてのようだ。

「おお、こちらでござるか。むむ・・・・・・・・なかなか味わいのある店構え・・・・・・・・」

「また～単に古いだけですよ」

「いやいや、長谷川理髪店の歴史を感じさせますな・・・・・・・・うむ。実に良い」

「左様ですか。恐れ入ります」

伝衛門さん、レトロな長谷川理髪店の店構えに感じ入って、しげしげと眺めている。

「時に長谷川殿」

「はい？」

「この髪型のことは奥方様にもご内密に願いたい」

伝衛門さんがぐるりと向き直ると、人差し指を口に当て声を潜めて長谷川さんに囁く。

「そうなんで？ まあ奥方様ってえほどの代物じゃありませんがね」

「疑うわけではござらんが、何せご婦人方は無類の話好き。聞けば体操教室にも参加なさっておられるとか・・・・・・・・どこから話が漏れんとも限りませんからな。こうしたことは隠密裏に遂行した方が楽しみも増すというもの」

「なるほど・・・・・・・・じゃあちょっと、買い物にでも行ってもらいましょうか」

「おお、それは名案」

ニコニコと相好（そうごう）を崩す伝衛門さんである。

「かあちゃ～ん、今帰ったよ」

「お帰んなさ〜い」

「今日はお客さんと一緒」

「お客さんってあんた、今日は休みでしょう？」と言いながら、長谷川さんの奥さんが顔を出す

。

「あらいらっしゃいませ」

「これはお休みのところ恐れ入ります」

深々とお辞儀をする伝衛門さん。

「いえいえどういたしまして」

「こちらね、総帥。今度しにあくらぶで将棋を一緒に担当する方だよ」

「そうすいってあの、偉い人の総帥？ 総帥さんっておっしゃるんですか。まあ珍しいお名前」

「いや、総帥は通り名でござる。本名は林伝衛門と申します」

「あら林さんて、あの有名な林一族の方ですか」

古くからこの辺りを本拠とする林一族を、知らない人はもぐりである。

「有名などとはおこがましい限り」

「いえいえ、もうこの辺りで林さんっていったら知らない人はいませんよ。今、お茶淹れますね。あんた、そこじゃ何だから上がっていただいたら？」

「うん？ いや、店の方がいいんだ」

何しろこれから極秘の任務が控えているのだ。

「そうなの？ それじゃちょっとお待ちくださいね」

「恐れ入ります。いやあ店内もなかなか趣がござりますな」

伝衛門さんが古めかしい店内を見回して言う。

「いやあ骨董品みたいでお恥ずかしい限りです」

「とんでもござらぬ。真鍮の金具など、磨かれてピカピカですな」

「いや〜ほんとに古いだけなんですけどね」

言いながらも長谷川さん、ニコニコと嬉しそうだ。

「お待たせしました」

長谷川さんの奥さんがお茶を淹れてくれる。

「空茶で申し訳ありませんね」

「いやいや、頂戴いたしまする……む、これはなかなか美味しいお茶ですな」

奥さんが淹れてくれたお茶は薫り高く、美しい緑色をしている。

「あらそうですか。そりゃ良かったわ」

「またこの湯加減が絶妙ですなあ。木下藤吉郎ばりでござる」

「まあ恐れ入ります」

奥さんはお褒めに与りニコニコしている。

「ところでかあちゃんさあ、今晚のおかずはもう決まったの」

「ううん、あんたが帰ってきてから聞いてみようと思って」

「お、そいつは都合がいいや……」

長谷川さんが小声でつぶやく。長谷川さん、奥さんを追い出す作戦である。

「え？ 何がいいって？」

「いやいやこっちの話。そうさなあ、何がいいかなあ。そうだ、お前さ、魚勝にでも行って今日は何が入ってるか聞いてみなよ。で、そのおススメのいいや」

「じゃあお魚がいいのね」

「うん。お魚お魚♪ 総帥はどうなさいます？」

「我輩はその時分までにはお暇（いとま）いたすつもりでござる」

「いいんですか？」

「御意。家でも夕飯が用意されておりますのでな」

「じゃあ俺たちの分だけでいいや」

「そう。それじゃちょっと行ってくるわね」

「ああ行っといで」

「総帥、申し訳ありませんね、お構いもしませんで」

「いやいや、ちくと打ち合わせにお寄りしただけでござる。どうぞお気になさらず……」

奥さんが買い物籠を提げて出掛けていく。その後姿を見送りながら長谷川さん、ニコニコしている。

「しめしめ……これで小一時間は帰ってこないぞ」

「はて面妖な……魚勝と申す店は、確か近くではござらぬか？」

林家では魚勝をひいきにしている。伝衛門さんも訪ねたことこそないが店の場所は知っている。合点がいかない。

「すぐそこですよ」

「何と！ それでは急がねばなりませんな」

「大丈夫。魚勝の親父は話好きでねえ、行ったらまず一時間は帰ってきませんよ」

長谷川さんは、話好きの親父が手ぐすねを引いて待っている『魚勝』に奥さんを派遣し、時間を稼ごうという算段である。

「左様でござるか。それは何より」

「それでは早速始めましょうか」

「お願いいたしまする」

伝衛門さんが椅子に座る。長谷川さんはその首にクロスを巻くと、髪に櫛を入れて髪の長さを確かめている。

「大分御髪（おぐし）も伸びてきましたね」

「左様。長谷川殿の仰せのとおり」

「また～仰せのとおりなんて大袈裟な」

以前、長谷川さんにリンデン総帥の写真を見てもらったとき、大分髪を伸ばさないとこのような髪型にはできないと言われた伝衛門さんは、仰せに従ってこのところ髪を伸ばしているのがある。

「我輩も初めての経験ゆえ、勝手が分かりませんでの」



「私も生まれて初めてですよ。長谷川理髪店としても開闢（かいびやく）以来ですね、多分。ポマードじゃあだめだよなあ……。あんまり使ったことないけど、ちょっとこの、スーパーハードのワックスってやつで、試してみるか」

古めかしい長谷川理髪店でも、ワックスなど整髪料の類（たぐい）は用意があるようだ。たまにお客さんからガッチリ固めて欲しいなどという要望もある。

「上手くいくかな……。確かこうやって小房に分けるんですよ」

長谷川さんは手にワックスを取ると、手際よく伝衛門さんの髪を『怒髪』に整えていく。とても初めてとは思えない手捌きである。伝衛門さんは白髪頭で、髪質は結構硬い方だ。

「おお！ 立ちますな、かなり！ さすがプロ！」

鏡に映る己が姿を見ながら伝衛門さんが言う。鏡の中には、ちょっと新薬師寺の十二神将のようになった伝衛門さんが映っている。

「ふむ……。何やら伐折羅（ばさら）大将のようでもありますな」

十二神将は仏像の中では天部に属し、甲冑に身を包んだ武将の姿で表される。伐折羅大将というのは、その十二神将の中でも特に人気の高い、カッコ良さ抜群の像である。カッと目を見開き、口を大きく開けた憤怒の形相で仏敵を威嚇する。伝衛門さんも大好きな仏像なので、ニコニコと鏡を見つめている。

「バサラタイショウって何ですか」

「あ、ご存じござらぬか。伐折羅大将と申すのは、奈良の新薬師寺にある仏像でしてな。これがまたカッコ良くての……」

「へえ～さすが総帥だ。物知りですねえ！」

「いやいや、ちょうどこの髪の中の立ち具合がの、ちくと似ておるので」

「へえ～仏像でもこんな髪型があるんですか……」

言いながら長谷川さんも鏡の中の伝衛門さんを見つめる。

「へえ……。意外と似合ってますよ！」

毎朝のラジオ体操を欠かさず、食事は腹八分目。友人と銀輪部隊を結成して自転車の遠乗りを楽しんでいる伝衛門さんである。七十を越す年齢とは思えないほど肌艶もよく、体躯も引き締まっているのである。

「意外とは失敬な」

「あ、こりゃ失礼。あの写真を見たときはどうなることかと思ったんだけど……。う～ん、いやあ似合いますねえ。びっくりだ」

「うふふふふ……。恐縮でござる」

伝衛門さん、ニコニコと相好を崩している。

「でも、総帥は髪質が硬いから立つには立つんだけど、まだやっぱり長さが足りないかねえ……。あの写真くらいに立てるとなると、相当伸ばさなきゃだめですね……。あと倍くらいかな」

「むむ……。由井小雪のような総髪にせねばなりませんかな」

「ああ、由井小雪ね。それなら私にも分かりますよ。まあ、あそこまでなくてもいい

かなあ・・・あんまり伸ばしすぎても今度は逆に立たせるのが難しくなるしね。ちょうどいい長さってのを見極めないと・・・」

「なるほど・・・全体に長いだけでもだめでしょうしな」

「そうだねえ、バランスがねえ・・・それじゃこうしましょう。時々今日みたいに寄っていただいて、塩梅を見てみると・・・で、切った方がいいところは鋏を入れていくと」

「恐縮ですな～お手数（てかず）をお掛けいたして」

「いえいえ、どうせヒマですからお安い御用ですよ。私の方でもね、ちょいといろんな整髪料なんか試してみますよ」

「それはかたじけない」

「何だかワクワクしてきましたねえ。嫌いじゃないな、こういうの。それじゃ、今日は流しちゃいましょうか」

「お願いいたしまする」

「問題は色ですよ～どうするかな・・・やっぱり金髪がいいんでしょう？」

「御意。最もインパクトのある色でなはいかと」

「染めるとずっとそのままになっちゃうし、そういうわけにも行かんでしょう？」

「左様ですな～さすがにねえ・・・それと、他にも問題が」

「ええっ？ 問題？」

「左様。よくよく考えてみますと、この髪型ではヘルメットが被れませんな」

「あっ！ そうか、そうですよね」

「う～む、いかがいたそう・・・」

「そうですよねえ・・・」

そんな話をしながら長谷川さんが伝衛門さんの頭をシャンプーしていると、奥さんが買い物から帰ってきた。

「ただいま～」

「ええっ！？ もう帰ったの？ やけに早いじゃないか」

「あら、シャンプーしてるの？ 今日はね、魚勝のおじさん、仕出しの配達に行って留守だったの。小僧さんしかいなかったわ」

「あの若いのか・・・あれじゃあ話にならないねえ」

思わぬ事態に焦りつつ、長谷川さんが話を合わせる。が、さすがはプロである。そうした間も手を止めることなく、伝衛門さんの髪を洗い終わるとタオルドライし、ドライヤーを当てている。

「そうなのよ。まだまだ修行が足りなくてねえ・・・切り身を見ただけじゃ魚の区別も付かないし。いつも刺身のツマの大根をスライサーで切ってるだけだもの」

「あれもさあ、かつらむきができないからだってえじゃねえか。まったくなあ。魚勝もさ、配達だけならその小僧に行かせればいいものを」

「それがさ、配達先で料理の盛り付けまで頼まれてるんだって」

「そうか。全く、あの虎魚（おこぜ）みたいな顔のどこからあんな料理が出てくるのかいっつも不思議なんだけど、旨いよなあ魚勝の仕出しは」

魚勝の親父さんと長谷川さんは、将棋のライバルである。このところ長谷川さんの連敗中で、勢い長谷川さんの魚勝評は辛口になる。虎魚と聞いて奥さんと伝衛門さんが嘔き出している。

「虎魚はいくら何でもひどいんじゃないの。何しろ仕入れの目利きが違うし、加えてあの包丁捌き。料理に品格があるしね。おかみさんの煮物も絶品なもの。でさ、鰹のいいのがあったから買ってきたわ」

「お、もう初鰹が出たかい」

「今日初めて入ったんだって。お客さんが来たら勧めろっておじさんに言われてたらしいわ」

「さっと炙ってな、にんにく、しょうが、浅葱（あさつき）、貝割れ、セロリに大葉に若布と酢醤油で。旨いよなあ、鰹のたたきは」

長谷川さん、鰹と聞いて涎が垂れそうな顔をしている。軽く塩を当てたあと、さっと炙って氷水で冷やし、スライスした鰹の上に切った薬味を山盛りにして食べるのが長谷川さんの好みだ。

「はいはい」

奥さんが台所の方へ消えると、声を潜めて長谷川さんが言う。

「ああよかった。危ないところでしたね～。まさかこんなに早く帰ってくるとは」

「御意。危うく目撃されるところでしたな」

伝衛門さんもひそひそ。

「ほんとうに……」

「あんたったら、何をこそこそ話してるの？ みたらし団子買ってきたんですけど、総帥もいかがですか？」

「おお！ これは辰巳堂ですな♪」

伝衛門さんが辰巳堂の包み紙を見て早くも相好を崩している。

「大福もあるんですけど、どっちがいいかしら」

「おお！ 我輩は大福を殊の外好んでおりますな」

伝衛門さんも目がない辰巳堂名物の大福。早いときにはお昼過ぎには売り切れてしまい、『完売御礼』の札が下がる。

「あら、そりゃよかったわ。今日はねえ、珍しくこの時間でもあったのよ。いつもはとっくに売り切れてるんですけど。でもウチのはみたらしの方が好きなんですよ。ね」

「うん。旨いよなあ～辰巳堂の餅菓子は」

「御意♪」

奥さんが台所の方へ引っ込むと、また二人はひそひそ。

「で、総帥。頭はまあその方向で行くとして、顔の方はどうなさるんです？」

「その件じゃが、メイク担当は既に確保してござる」

「どなたです？ まさかヤマモトさんとか？ 何だか事情を知ってるみたいですよ」

ヤマモトさんというのは、『しにあくらぶ』で唱歌を担当することになっている、八十五歳の元気なおばあさんだ。通称は『かっちゃん』という。

「ヤマモト殿も作戦についてはご存じじゃが、メイク担当は我輩の家内でしてな」

「奥様が！ 奥様もご存じなんですか」

「御意」

「へえっ！ よく反対されませんでしたね」

「うん？ どういう意味ですかな？」

「普通嫌がるのでは……」

「これはしたり！ 嫌がるとは心外な」

「あ、失礼失礼」

「しにあくらぶの件は、話したところ興味がないようで来る気はなさそうなんじゃが、我輩がこの計画を密かに打ち明けたところ、俄然興味を示しましてな。もう大乗り気で、やりたいやりたいなどと……」

これを聞いて長谷川さん噴き出す。林家というのもしかして一家中で面白いのか？

伝衛門さんの奥さんは雪乃さんといい美人の誉れ高い人である。伝衛門さんとは一回り以上年が離れている。まだ女学生だった雪乃さんを見初め、何とか見合いに漕ぎつけた伝衛門さん。最初、『伝衛門』などという古臭い名前で、しかもそんなに年上の人はいやだと散々駄々をこねた雪乃さんであったが、本人に会ってみて気が変わった。見合いの会場に愛車のベントレーで乗り付けた伝衛門さん。なかなかダンディでおしゃれ、その上とびきり面白い人だったのである。

「いやあ面白い奥さんですねえ！ さすが総帥の奥さんだ。それから肝心の服装の方は……」

そこまで話したところへ、奥さんが大福とみたらし団子を菓子皿に載せて運んできた。

「何が面白いんですって？」

「いや、総帥の奥さんがね、面白い人なんだって」

「そうなんですか」

「旨そうだねえ。ささ、総帥もどうぞ。あ、お前、お茶が冷めちゃったよ」

話が詳細に及ばぬよう、長谷川さんが予防線を張る。

「そうだわ。お茶も淹れ替えましょうね」

「おお、これは恐縮でござる」

すっかり髪が元通りになった伝衛門さん、好物の大福を前にニコニコと目がなくなっている。

「して、本日の御代はいかほど……」

「またあ、冗談はやめてくださいよ」

「いやいや、そういうわけには」

「水臭いことは言っこなしですよ。こうなったらこの長谷川理髪店、全面的に協力させていただきます」

長谷川さんが胸を叩く。

「左様でござるか……誠にかたじけない。ではお言葉に甘えさせていただきまする」

「いえいえ、ほんと気にしないでくださいよ」

「お待たせしました。あったかいお茶、どうぞ」

「おお、奥様、恐縮でござる」

さて、辰巳堂の大福と薫り高いお茶を美味しくいただいた伝衛門さんは、長谷川理髪店を辞して自宅へと自転車を走らせるのであった。

その後姿を見送って、長谷川さんと奥さんが話している。

「でもさ、総帥って何だかおかしな人だよな」

「うん。すごくおかしな人だよ」

「時代劇みたいだよな」

「うん……それだけじゃなく」

「それだけじゃないの？ どういうふうに？」

「う～ん……ちょっと口では説明しがたい」

まさかあのような企てがあるとは、口が裂けても言えない長谷川さんである。

「へええ～」

「俺もさ、床屋になってからかれこれ五十年近くなるんだよな」

「もうそんなだっけ」

「そうだよ。親父に店を任されてからが……ざっと三十五年か。いろいろ変わったお客もいたけど、あんなに面白い人は初めてだなあ……」

「そうそう、総帥って通り名だって言ってたけど、あんたもあるの？ 通り名」

「うん？ あるよ。『ばーばー』」

「ちょっと！ それあたしのこと！？」

「床屋のことだよ。英語でバーバー」

「何だ」

「そうだ！ 床屋業五十年を記念して、ウチも心機一転、改名するか！」

「何て」

「ばーばーはせがわ」

長谷川さんが伝衛門さんの髪の色を見つつ、怒髪の色を目指しているある日のこと。初めての客が長谷川理髪店を訪れた。その客は恐る恐る店のドアを開くと、古色蒼然たる店内を見回して呆然と立ち尽くしている。

「……うっそ。マジかよ……」

「いらっしゃい」

その日は朝から客もなく、自慢の鋏と剃刀の手入れも終えて暇を持て余していた長谷川さん。ドアにぶら下げたベルがカランカランと音を立てたので、読んでいた新聞の将棋欄から目を上げて入り口を振り返ると、真っ赤な長髪の若者がぼーっと突っ立っている。ついで見かけないタイプの客だ。黒の革ジャンにあちこち穴の開いたぼろぼろのジーンズ、足元はブーツという出で立ちである。首にはドーベルマンの首輪のような革バンドを巻き、耳と鼻にはピアスをしている。指には髑髏（どくろ）の指輪だ。長谷川さんの目が点になる。ウチの客ではなさそうだ。店を間違えたのか？

「お客さん、散髪ですか？　ウチは床屋ですけど」

「……………。あのさ～、駅前の床屋って、他にある？」

「くぬぎ台の駅前ですか？　だったらウチだけですよ」

「え～？　じゃあやっぱここかよ……うっそ～マジっすか？」

若者は店内を見回しながらぶつぶつぶやいている。

「どうかしました？」

「あのさ～おっさんとこでさ～、すっげえかっけー髪型やってるって聞いたんだけど～、マジ？」

「はあ？　かっけえ？」

「そう。こう、ばあっと爆発してるやつ！」

若者が両手で怒髪を表現する。

「ええっ！？　お客さんどこで聞きました？」

「聞いたんじゃないかってえ、俺のダチが見たって言ったの」

「見た！？　どこで！？」

「どこでってここでじゃん？　ここ以外でおっさん、床屋やってんの？」

「ああ、それもそうだね……」

ということは、かあちゃんの目を盗んで総帥の頭をやってるとこ、見られちゃったかな……  
・やばいじゃないの。

「いやあ、あれはちょっと試してただけで、お客さんにはまだやったことないんだけどねえ」

「マジで～？　なんかすっげえかっけージジイがいて、マジヤバイってダチが言ったけど」

「やばいって何？　何かまずいの？」

「やばい」などと言われて長谷川さん、ちょっとドキドキしている。

「じゃなくってえ、イケてるとかカッコイイって意味」



「へえ～今どきの人はカッコイイってのやばいとか言うんだ」

「そうだよ。旨いときなんかもヤバイって言うよ」

「うまいって何、美味しいってこと？」

「そうだよ」

「あ！ それで分かった！」

長谷川さん、はたと膝を打つ。

「何が～？」

「この前ねえ、電車に乗ってたら前に座った女学生がさ、お菓子か何か友達と食べながらやばいやばい！って騒いでたの……」

その日、墓参りに出かけた長谷川さんが電車に乗っていると、向かいの席に陣取った女子高生たちが紙袋からベーグルを取り出して食べ始めた。ありゃりゃ……近頃の女の子はやだねえ、つつしみがなくて……。女子高生たちは、長蛇の列に並んでやっとゲットしたベーグルに夢中である。何これ、超やばくな～い？ うっそ～やばいよこれ！ 並んだ甲斐あったよね～！などと騒いでいたのだ。

「食べてたのは何だか、太ったドーナツみたいなもんだったねえ。てっきりそれが腐ってたかなんかしたのかと思ったの。それにしちゃ嬉しそうだからおかしいなと思ったんだけど、あれは美味しいってことだったんだな」

ぷ～っ！ 若者が嘔き出している。

「おっさんもさ～、もうちょい勉強しないとな～」

「ほんとだね～。ってことは、ほめ言葉ね」

「当たり前じゃん。食ってたのはきっとベーグルだな。流行ってんだよ今」

「ああ、あれ、ベーグルっていうの」

「パンみたいなもんだな。旨いんだよこれが！」

「へえ～。でもねえ、年頃の女の子が電車の中で物を食べて、やばいとかって、まずいよねえ」

「古っ！ 今どき普通じゃん？」

「そうかねえ……」

長谷川さんは得心が行かない様子。

「そう言えば人の見てる前でお化粧してる女の子もいたな……全く、世も末だなあ」

「あー、化粧してるときの顔って、結構笑えるよね。特にマスカラ塗ってるときなんか変顔で。自分じゃ気がつかないんだろうけど、マジ、変！」

「そうだよねえ。何も人様に楽屋裏見せなくってもなあ」

「使用前、使用后ってか。ま、いいんじゃない？ おっさんが心配することじゃないし」

「まあそうなんだけどねえ……」

近頃の若い女の子の辞書には、恥じらいなどという言葉はないらしい。大和撫子はどこへ消えてしまったのか。日本の行く末に思いをいたし悩ましい長谷川さんである。

「でさ、肝心の頭だけど、やってくれんの？」

「う～ん・・・料金もまだ決めてないんだけどねえ」

長谷川さん、腕を組んで悩んでいる。

「じゃあ無料サービスでやってよ。お試しってことでさ～」

その顔を下から覗き込んで若者が言う。

「ええ～そういうわけにもねえ。ウチも元手掛かってるし」

「そっか～・・・じゃあいくら？」

「う～ん・・・お客様の頭だとねえ・・・カットにセットもしなきゃいけないしね・・・

・そうさなあ、二千五百円ってところかな？」

長谷川理髪店の一般料金は、千八百円である。長谷川さん、ちょっと吹っかけてみたのだ。

「安っ！ ならやってくんね？ ヘアサロンなんか行くと倍以上するぜ」

ええっ！？ 倍以上？ ならもうちょっと吹っかけとくんだった・・・。

「まあ仕上がりは保障できないけど・・・」

とは言いつつも、実はこのところの出来映えに大いに自信をつけている長谷川さんなのである

。

「う～ん、まあとりあえずやってみてくんね？」

「分かりました。じゃあ始めますね。どうぞ」

「おう」

長谷川さんが若者を椅子に案内し、クロスを首に巻きつける。

「じゃあまずひげ、当たりますね」

「当たる？ 何か当たるの？ ラッキー♪」

「じゃなくて、ひげを剃りますね」

「何だひげ剃りか」

若者が、ひげの薄い顎を撫で回す。

「ひげはいいや、とりあえず」

「じゃあ洗髪してからカットしますね」

「OK」

「お客様の頭、こう言っちゃ何だけど、赤熊（しゃぐま）みたいだねえ」

若者の真っ赤な長髪をシャンプーしながら長谷川さんが言う。

「シャグマ～？ 何それ」

「ああ、若い人は知らないかなあ」

長谷川さん、ちょっと優越感に浸る。

「歌舞伎とかに出てくる頭なの。こういう真っ赤な髪のもなんだよ。お客さんのはちょっとサラサラだけどね」

「マジで～？ カブキって、エドの人とか出てくる昔のもんでしょ？ そんなのにこんなイケテル頭があったんだ！」

「うん。真っ赤な長～い髪のをね、振りたてて踊るんだよ。頭をこう、ぐるんぐるん振り回し

てね」

「へえ～！ 俺たちのライブみたいじゃん！」

『らいぶ』？ またナゾの言葉だ。何だ？ らいぶって……。あんまり聞くとバカにされるから黙っとくか。

「白い頭のもいるんだよ」

「白？ 俺たちの場合は紫とか緑とかゴールドだな」

「そうかい」

「白髪じゃジジイみたいじゃん」

「それもそうだね」

あはははははは……。

「さてと」

最近伝衛門さんを練習台にして修行を積んでいる(?)長谷川さんは、若者の髪をシャンプーすると、迷うことなく自慢の鋏でバサバサとカットしていく。

「おいおいずいぶん大胆に切るじゃんか。大丈夫かよ」

「このぐらい思い切りよく切らないと、ああはならないんだよ」

「マジで～？」

「まあ見てなさいって」

「ふ～ん……？」

床には切り落とされた赤い髪 of 毛の山。若者、半信半疑である。

「これでよしと」

カットを終えた長谷川さんが取り出したのは、『ウルトラスーパーハードワックス・プロ仕様』と容器に書かれたワックスである。これはこの度、伝衛門さんの怒髪用に新しく仕入れたものだ。何しろ『ウルトラ』である。長谷川さんはそのワックスを手にとると、手際よく若者の髪を怒髪に整えていく。鏡の中には、怒髪天を突く真っ赤な髪 of 若者が出来上がりつつある。

「すげえおっさん……マジやべえよ……」

その姿を鏡の中に見て、若者は感に堪えない様子。

「こんな感じでどうです？」

「もうっ最っ高！ すげーやべえ……ウルトラサイヤ人みたいじゃん」

若者は鏡に映る己が姿を矯(た)めつ眇(すが)めつ、「やばい」を連発して興奮している。はあ？ 『うるとらさいやじん』って何？

「これってさ、カットでこうなの？」

「カットがポイントだけど、それとこのワックスだねえ。『ウルトラスーパーハードワックス・プロ仕様』。お客さん、髪、軟らかい方でしょ」

「そうなの。さらさらストレートヘアならバッチリ決まるんだけど、立たせるの難しくってさ……。これって、ドラッグストアとかで売ってる？」

「これはねえ、床屋の組合で扱ってる商品だから、他にはないねえ……。けど、ウチでならお分けできますよ」

「マジで～？ ハウマッチ」

「はあ？」

「だから～、いくら～？」

「これはねえ・・・ええっと・・・」

長谷川さんはポケットから老眼鏡を取り出して、小さな字で書いてある値段をしてみる。

「二千五百円だねえ」

「高っ！ もう少し安くなんねえの？」

「う～ん、こればかりはねえ。でも、これ一本でかなり使えるよ。こんだけ大きいしね」

実は長谷川さん、組合員価格で仕入れているので、原価はもっとずっと安いのだが・・・。

「そっか～。でもこれがポイントなんだよな～」

「そう。これとカットね。カットはたまに来ればいいけど、毎日のセットはお客さんがするでしょ」

「だよな～。じゃあこれももらってくか。俺なんか普通のワックスじゃ、ぜってーこうはなんないもんな～」

若者は鏡の中の自分を、角度を変えてはしげしげと眺め回す。

「あ、後ろはこんな感じね」

長谷川さんが後ろ姿を合わせ鏡で若者に見せる。

「う～ん・・・後姿もバッチリじゃん♪ やっぱもらってくわ、これ」

「ありがとうございます。ワックスをつけるときはね、まずワックスを両手に取って髪全体にざっと伸ばしてから、髪の毛をこう、小房に分けてね、立たせてくの」

長谷川さんが鏡の中の若者にセットの仕方を指導する。

「なるほどね。サンキュ」

「それじゃあ今日は特別オマケしてね、両方で四千円でいいですよ」

「マジで～？ 超ラッキー！ じゃあこれからもときどき来るから頼むぜ」

「承知しました。今度はカットとセットで二千五百円ね」

「分かったよ・・・はい、じゃあ五千円で」

「毎度ありがとうございます。五千円お預かりで、千円のお返しです」

「また来るからね」

「お待ちしています。あ、お客さん、お名前は？」

「武田」

「武田さんね、またどうぞ」

「おっさん、グッジョブ」

若者が親指を立てて見せる。はあ？ 『ぐっじょぶ』って、何？

腰壁にタイルなどあしらった超レトロな雰囲気の長谷川理髪店から、真っ赤な爆発した髪の若者が出ていく。何とも不思議な光景である。

「So cool! マジやばいぜ♪」

若者は、長谷川理髪店のウィンドウに映る己が姿を眺めてご満悦のようだ。長谷川理髪店の床

には、真っ赤な髪の毛の山が残っている。長谷川さんは箒と塵取で、その山を手際よく片付けた。

次の日。今度は緑色の髪の毛の若者だ。出で立ちは昨日の若者と似たようなものである。やはり長谷川理髪店のことを『ダチ』に聞いたのだと言う。柴田と名乗った若者は、カットとセットが済むと「やばい」を連発し、何を思ったか、長谷川さんの写真を撮らせてくれと言う。ついでに店の外観なども携帯電話で撮影すると、同じように『ウルトラスーパーハードワックス・プロ仕様』を買って帰っていった。

そしてまた次の日。今度は紫色の髪の毛の若者が……。その日は続いて別のお客さんも現れた。くぬぎ台図書館に勤める司書の佐々木さんである。佐々木さんは定年を間近に控えた、白髪交じりで黒縁めがねの実直そうな男の人だ。長谷川理髪店の理容師は長谷川さん一人である。余程混んだときには奥さんがシャンプーくらいは手伝いに出てくるが、そんなことはめったにない。なので奥さんは二階に引っ込んだまま、内職に勤しんでいる。佐々木さんは古ぼけたソファに座って順番を待っている。置いてある週刊誌などめくりながらも、目の前の紫色の髪の毛の若者が気になって仕方がない。週刊誌を見る振りをしてチラチラと鏡に映る若者を盗み見ている。今日の若者もカットとセットが済むと「やばい」を連発し、これまた『ウルトラスーパーハードワックス・プロ仕様』を買って帰っていく。若者は黒田という名前らしい。佐々木さんは、ドアを開けて意気揚々と表に出ていく紫色の怒髪の後姿をまじまじと見つめている。長谷川さんが、床に散らばった大量の紫色の髪の毛を手際よく箒で片付ける。お次は佐々木さんの番である。

「お待たせしました～。佐々木さんどうぞ」

佐々木さんは、若者を見送って窓の外に向けていた顔をおもむろに長谷川さんの方へ向ける。驚きの表情である。

「……………。ご主人、今の人って……………」

「ああ、驚きました？ 最近始めたんですよ、ああいうの」

長谷川さん、伝衛門さんの件はおくびにも出さずとぼけているが、ちょっと得意そうでもある。

「そうなの？ いやびっくりしたなあ。どこで習ったんですか」

椅子に座りながら、佐々木さんが心底感心したように言う。

「いえね、今どきはいろいろと新しいことにも挑戦しないと、ウチみたいな床屋はね、やってけないですからねえ」

「すごいねえ、いつの間に」

「ちょいとね、練習する機会もあったもんですから」

「へええ、そうですか」

「いつもの感じでいいですか？」

佐々木さんにクロスを巻きながら長谷川さんが尋ねる。

「はい。それでお願いします。まさか今みたいな髪型ってわけにもいかんでしょう」





次の日の朝。長谷川さんの奥さんが長谷川さんと呼んでいる。

「あんた〜、ちょっといい？」

「何だい」

「ちょっとこれ、どうしたのよ」

長谷川さんが見ると、店のゴミを入れてきっちり縛っておいた事業系ゴミ袋の口を、奥さんが開けて覗いている。

「ありゃりゃ・・・何だってゴミなんか開けて見てるんだよ」

「だって、ゴミ出そうと思ったらいつになく多いからさ。何が入ってるんだろうと思って開けたら、赤やら緑やら紫やら・・・何この髪の毛は」

「何ってお客さんのだよ」

「ウチの？」

「決まってるだろ？　ウチ以外にどこのゴミを入れるんだよ・・・」

言いながら長谷川さん、内心焦っている。何で開けて見るかな〜きっちり縛ったのに。

「そりゃそうだけど・・・こんな頭のお客さん？」

「そうなんだよ。何だかやたらと若い客が入れ替わり立ち代わり来ちゃってさ。俺もびっくりしちゃったよ」

もちろん伝衛門さんの件はおくびにも出さない。

「へええ〜どうしちゃったのかしら。それにしてもこんなにたくさん。坊主にでもしたの？」

「いや、それがさ、みんなすごい長髪でね。こ〜んなに長いの」

長谷川さん、腰の辺りまで手を伸ばして見せる。

「そんなに？　男が？」

「うん。でさ、何だかこう、爆発してるような頭にしてくれってんで、俺も参っちゃったんだけど」

「そりゃそうだわねえ。若いお客さんなんか滅多に来ないもの。でも何でウチなんかに来たんだろうね。この頃の若い男は、美容院なんかで髪切るっていうじゃない」

「全くなあ。俺も最初、店を間違えたのかと思ったよ。一番初めに来た客もヘアサロンがどうか言ってたしなあ。まずもってウチとは縁がなさそうな客だったっけ。でもさ、この『ウルトラスーパーハードワックス』っての、みんな買ってくの。結構儲かっちゃってさ」

長谷川さんは『ウルトラスーパーハードワックス』の容器を手に取り、ご満悦の表情。

「そうなの？　ならいいじゃないさ」

「うん。で、若いのが次々来るからね、ウチもいよいよ名前変えるの、本格的に考えようかと思っただけさ」

「へえ〜『ばーばーはせがわ』？」

「うん」

長谷川さん、ニコニコと嬉しそうである。

「でもねえ・・・店をこのままで、名前だけ変えてもどうなんだろうねえ・・・それに跡継ぎだって・・・」

奥さんの言葉に長谷川さんの眉が曇る。

長谷川さんには一粒種の晋一くんがいるのだが、家を出て長い間音信不通だった。長谷川さん自身が父親に厳しく育てられた反動と、割合遅くできた一人息子だったのとで、長谷川さんは晋一くんに甘あまだった。欲しいと言われればギターでも何でも買ってやった。当然辛抱というものを知らない晋一くんは、いざ長谷川さんが自分の技術を伝授しようとする、「床屋なんかダサイ！俺は音楽で身を立てるんだ！」と宣言して高校を出るとすぐ家を飛び出してしまったのだった。

それが今年の正月のこと。差出人不明の年賀状が一通届いた。文面はたったの三文字。『修行中』とあった。忘れもしない息子のへたくそな字である。しかし残念ながら年賀状なので消印がない。未だに所在は不明のままなのである。それでもどこかで元気にしているらしいことが分かり、長谷川さん夫婦は泣いて喜んだのだった。

「う～ん・・・それもそうだよな・・・。いや、俺は晋一がどこかで床屋の修行をしてると信じてるんだ」

これは長谷川さんの希望的観測によるもので、物事をいい方に考えるのが長谷川さんのいいところだ。楽道家と言われる由縁だが、奥さんによればそれを能天気と言う。

「ほんとにそうかしら。何の修行とも書いてなかったけど」

「いや、きっとそうだよ。じゃなきゃわざわざあんな年賀状、寄越すもんか」

「そうかねえ・・・だといいいんだけど。音楽の修行じゃあないのかしら・・・」

息子の出奔以来ずっと影膳を供えてきた奥さんである。それっきりまた音信が途絶えているので、心配しているのだ。

「いいか、考えてもみろよ。俺たちの子どもだぞ？ あいつに音楽の才能があると思うか？」

「それもそうよねえ。あんたも私もからっきし音痴だもんねえ」

「だろ？ あれは絶対床屋の修行だと俺は睨んでる。よし！ この際だ。晋一がいつ帰ってきてもいいように、思い切って店も改装するか！」

「え～あんた、そんなお金あるの？」

「俺もかあちゃんも、少ないとはいえ年金もらってるだろ。それにかあちゃんの内職と。で、店の従業員は俺一人。経費はほとんど掛かってないからね。幸い親父の建ててくれた店だから借金もなし。こう見えてもこの長谷川理髪店、結構貯金はある。何とかなるんじゃないかと俺は睨んでる」

長谷川さんが胸を叩く。

「そうかしら・・・それでお客さんが増えればいいけど」

「それに、俺もこの年だけど体だけは丈夫だろ？ 区健康診断でも問題なかったし」

「ほんとだね。ウチはありがたいことに二人とも体だけは丈夫だよねえ」

長谷川さんも奥さんも、風邪ひとつ引かないのが自慢である。

「だろ？ この分だと、あと二十年は行けるんじゃないかと俺は睨んでる」

よく睨む長谷川さんである。

「あはは・・・大きく出たわね。まああたしの裁縫もさ、この頃ちょっとした実入りがあるし」

長谷川さんの奥さんは内職で和裁をやっているが、ミシンも得意だ。しかもそのミシンは昔の足踏み式のミシンである。近頃は、内職を頼まれている呉服の森田屋から洋服の仕事も入るようになった。森田屋も一時は日本人の和服離れで厳しい時代も経験した。昔は普段着も和服と相場が決まっていた老人までも、着物を着なくなってしまったからだ。が、美大の服飾科を出たお嬢さんが、数年前に和服地を使った斬新な洋服のブランドを立ち上げたことで、息を吹き返した。加えて、あちこちの家で筆笥の肥やしになっている着物のリメイクも始めたところ、これも大当たり。注文が殺到するようになると、お嬢さんだけでは捌ききれなくなり、奥さんはその縫製の一部を任されている。これに加えて、この頃では浴衣の注文もちょくちょく入る。今どきの浴衣はミシンで縫ってあるものがほとんどだが、ミシンで浴衣となればこれはもう半日仕事である。次から次へとミシンで浴衣を縫い上げては森田屋に納めている。手間賃を安く抑えているため売値も安くなり、若い女の子を中心に売れ行きも好調だ。

「昔はこんな派手な浴衣はなかったけどねえ・・・時代は変わったわ」

奥さんからすれば、近頃の浴衣はびっくりするような柄行だ。今どきの娘はまるでドレスでも着こなすような感覚で、浴衣を楽しんでいるようだ。加えてこの頃は男物もよく出ている。浴衣に合わせた袋物のリクエストもあり、ちょいちょいと縫ってしまうが、これまた好評である。デザインを考えてくれるのは森田屋のお嬢さんだ。「ちょーかわいい♪」などと言って、若い子がよく買っていきそうだ。近頃はカップルで浴衣を着ていくと割引などというイベントもあり、若者の浴衣回帰はこれからも続きそうだ。

そんなこんなで奥さんは近頃大忙しなのである。

「そうねえ、いくらぐらいかかるか、田中さんところに見積もりだけでも頼んでみれば」

田中さんというのは近所の工務店である。

「そうさなあ、それじゃちょいと話しに行ってみるか」

「そうしたら。でもこの人たち、どんな頭にしたんだろ。ちょっと見たかったな」

「また来るって言ってたから、今度来たら呼んでやるよ」

「そうしてちょうだい」

「分かった。そうか、『ばーばーはせがわ』、ついに新装開店なるか？」

ここはくぬぎ台小学校である。『しにあくらぶ』の作戦会議の後、廊下の片隅で長谷川さんが田島くんを呼び止めている。

「田島さん、ちょっと聞きたいんだけどね」

ポケットから俳句に使う句帳を取り出しながら長谷川さんが言う。

「何でしょう」

「『ぐっじょぶ』ってなどういう意味？」

「グッジョブですか？ 英語で、いい仕事してますねってことですね」

「ああ、そういう意味なの！」

「ええ。この頃若い人なんかよく使いますね」

「そうなんだ。いや、この間お客さんに言われちゃってさ。どういう意味だろうと思ってたの。近頃の若い人はわけの分かんない言葉使うでしょ。あ、田島さんは別だけどさ」

「あはは……。そりゃきっと長谷川さんの腕がいいから、敬意を表したんじゃないですか」

「そうかねえ」

「そうですよきっと。さすがですね、長谷川理髪店」

「いやそう言われると照れるな～。あ、それからさ、『うるとらさいやじん』って何だろう」

ときどき俳句や川柳もひねる長谷川さん、句帳にメモしていたらしい。

「ウルトラサイヤ人ですか？ それは漫画に出てくる人物ですね。あ、そうそう、ちょっとリンデン総帥に髪型とか似てるかもしれません」

「そうなの？ だからか……。何だろうと思ってたの。そうか、リンデン総帥に似てるんだ。ウルトラなんとなかっていうから、ウルトラマンの親戚かなんかかと思ってた」

「『龍の玉』っていう漫画に出てくるんです」

「へえ～。漫画はあんまり読まないから知らなかったよ。それからさ、『らいぶ』ってのは？」

「音楽の生演奏を聞かせるコンサートなんかのことですね。生中継のこともライブって言いますけど」

「音楽か……。あのお客さん、音楽やってるんだ。なるほどね……。リンデン総帥の親戚みたいなもんか。そういやそんな感じだったなあ……。ところでさ、ちょっと田島さんをお願いしたいことがあるんだけど、いいかな」

「何でしょう。僕にできることでしたら」

「ポスターをね、描いてもらえないかと思ってさ」

「ポスターですか」

「そう、店にね、貼りたいの。図書館の佐々木さんに勧められてね」

「ヘアスタイルのですか？」

「そうなの。今度新しい髪形を手掛けることになってさ」

「へええ～どんな髪形なんですか？」

「その、うるとらさいやじんみたいな、こう、爆発してるような……」

「ええっ！？ もしかして、総帥の目指してらっしゃる？」

田島くんは、伝衛門さんの作戦については承知しているようだ。

「そうそう。どうもね、総帥の頭やってるところ、見られちゃったらしくてさ……」

長谷川さんが、先日来の経緯を話して聞かせる。

「へええ～そんなことがあったんですか」

「うん。でさ、若いお客さんがその後も次々来るようになってねえ。何だか、ダチに聞いたとか言ってね。私や店の写真なんか撮ってるのもいたな」

「ああ、きっとツイッターとかで広まってるんですよ」

「ついったーって？」

「英語でつぶやきのことですね。独り言みたいに短い文章で、携帯電話なんかを使ってつぶやくんです」

「電話で独り言をつぶやく？ へええ～ますます分かんないや」

「きっと写真も載せてるんでしょう。ちょっとしたブームになってるのかもしれないね」

「そうか、ブームねえ……一時的なもんかなあ。これを機にウチも改装しようかなんて言ってるんだけど、ブームもいつまで続くかね……」

長谷川さん、ちょっと弱気になっている。

「いや、ツイッターなんかの力ってすごいですからね。あっと言う間に拡散するんですよ。お客さん、これからも増えると思いますよ」

「そうかねえ。だといいいんだけど」

「それに、佐々木さんがおっしゃってましたよ。長谷川さんの腕は一流だって」

「ええっ、そうなの？ まあ、親父に相当厳しく仕込まれはしたけどねえ。いやその佐々木さんにも、若いのの頭やってるところ見られちゃってね。カッコイイなんて言われちゃってさ。で、田島さんにポスター頼んでみたらって話になったんだよ」

「そうだったんですか」

「逆に佐々木さんは、田島さんの絵の腕が大したもんだって私には言ってたけどね」

「あはは……恐れ入ります。それじゃちょっと描いてみましょうか、ポスター」

「お願いできますか？」

「承知しました。若者の顔がいいですよ」

「そうだねえ、まさか総帥の顔というわけにも……」

あははははは……。二人で笑っているところへ伝衛門さん登場。

「我輩がどうかしましたかな？」

「あ、総帥。実は……」

長谷川さんが、伝衛門さんにも先日来の経緯を語って聞かせる。

「何と、そのようなことが……瓢箪から駒とはこのことすな。いや実に楽しい。世の中、何が起こるか分かりませんな」

「ほんとです。これも総帥のお陰ですよ」

「なんのなんの。長谷川殿の腕が呼び寄せた結果でござる。よかったのう」

「はい。お陰様で。それでね、今、田島さんにポスターをお願いしてたところなんです」

「ポスターを？」

「はい。総帥のヘアスタイルみたいなね」

「なるほど、ポスターで宣伝するわけですか」

「そうなんです。まさかウチであんな髪型をやってるなんて、誰も思わないでしょうからねえ……。それじゃ田島さん、よろしくお願いしますよ。急がないからね、時間のあるときにでも」

「了解です。頑張ってカッコよく描いてみますね」

「田島さんもグッジョブだねえ」

あははははは……。

さて、今日も伝衛門さんは長谷川理髪店へと向かう。自転車を押しながら、道々長谷川さんと話している。

「それでね、せっかく若いお客さんも増えてきたんで、思い切って店を改装してみようかなんて考えてるんですよ」

「何と、お店を改装なさると？」

「そうなんです。今どきの感じにね。ついでにこの際だから床屋業五十周年を記念して、店の名前も『ばーばーはせがわ』に変えようかと思ひまして。あ、ひらがなでね」

「左様ですか……。ふ～む……。惜しいのう」

「ええっ？」

「いや、名前はともかく、あの店のレトロな雰囲気が今どきなかなかおしゃれではないかと……」

「れとろ？」

「左様。懐古趣味とでも申しましょうか。昭和モダンな雰囲気が感じられまするな。年月を経た趣というのは、一朝一夕では作り出せませんからの」

「なるほど……。そういう考え方もありますか」

「御意。近頃では古い建物が簡単に取り壊されて、何の味わいもないビルなどに変わってしまうことが多く、我輩は残念に思っておる次第でござる」

「そうですか……。れとろねえ……」

長谷川理髪店は、先代が戦前に建てた古い建物だ。幸いこの辺りは空襲などにも遭わず、古い建物が所々に残っている。途中で多少の改築は施しているものの、長谷川理髪店もそのひとつなのである。ちなみに餅菓子の『辰巳堂』や、呉服の『森田屋』、うなぎの老舗『松葉』なども戦前の古い建物である。

「何とかあのレトロな雰囲気を残しつつ、改装ができないものかの……。いや、これは長谷川殿のお考えになることで、我輩が差し出がましく口を挟むのは失礼ですな。申し訳ない」



伝衛門さんが頭を下げる。

「いえいえ、とんでもない。なるほどねえ……確かにあの建物は戦前に親父が建てたもので、もう大分ガタが来てはいるんですが、私もそれなりに愛着は持ってるんですよ。ただ、今の時代には合わなくなってるのかなと……若いのが来てマジ？とかってびっくりしてましたからねえ……」

「いやいや、京都なんぞに参りますとな、若い人が古い町屋やレトロなビルなど、内装だけ新しくして、モダンな店を営んでいるところなどがござる。あれもなかなか良いものですぞ」

「そうですか……逆に古いものが若い人に受けるのかな」

「若い人にとって新しいのは当たり前。逆に古いものに新鮮さを感じるのかもしれないな……」

「そういえば最近、ウチの奴のやってる内職でも、浴衣の注文なんかが増えましてね。若い子に売れてるんだとか」

「おお左様。若い人の中では今、ちょっとした和服ブームが起きてますな。それも古来のルールなんぞ無視して、自由奔放に着こなしておる。加えて三味線や太鼓などの和楽器も若い人に人気とか。これは昔若者が洋楽に飛びついたのと同じ感覚かもしれないな」

「なるほどね〜。そうか、古いものが新しい、か……。そういえば最近、立派なカメラを提げた若い女の子が来たりして、店の写真なんか撮っていきますね……。あれもそうなのかな」

「左様ですか。くぬぎ台駅前商店街にも、結構古い店がありますからな」

「古いのがいいんでしょうねえ、きっと。いや総帥、さすがですね」

「いやいやとんでもない。我輩も長谷川理髪店の雰囲気気に入っておりますな」

「そうですねえ……これはまたちょっと考えてみましょうかねえ」

「左様でござるか」

「はい。誰かそういう相談のできる人がいるといいんですが……改装の相談は近くの工務店の親父に頼んでみるんですが、本気にしてないらしくて、そのうち見に行くよ、くらいのもんで。それに何しろ普通の大工ですからねえ……何かこう、しゃれっ気なんてものがあるわけじゃないし」

「ふ〜む……。長谷川殿、この件に関して我輩にちと心当たりがないこともござらん。少々お時間をいただけますかな？」

「ええ？ そうなんで？ そりゃ助かります。特に急いでる訳じゃないんで……」

「委細承知」

そうこうするうちに二人は長谷川理髪店に到着。

「今日はウチの奴、出掛けて留守なんですよ。夜遅くにならないと帰ってこないんで」

「おお、それは重畳（ちょうじょう）」

長谷川さんが店の鍵を開け、明かりを点ける。

「何ですか森田屋の反物の仕入れに同行するとかで。さ、どうぞ。今回は少し後ろの方をカットしましょうかね」

「切ってしまうのでござるか？」

椅子に掛けながら伝衛門さんが尋ねる。

「後ろの方はね、あんまり長くなると塩梅が悪いんですよ」

「左様ですか。ではお願いいたしまする」

「今日は時間があるから、ひげも当たりましょうか」

「おお、恐縮ですな」

「ちょっとタオルを蒸しちゃいますからお待ちくださいね」

「御意」

長谷川さんが古びたステンレス製の蒸し器でタオルを蒸している。続いて柱にぶら下げた研ぎ革で剃刀を研ぎ始める。

「そうそう、その雰囲気も何とも言えませんな」

「これですか？」

「左様。近頃はそのような光景にもなかなかお目に掛かれなくなりましたな。近所の床屋も、代替わりをしてから研ぎ革は使っておらぬようじゃ」

「今どきは替え刃の剃刀なんぞ使う店も増えてますからねえ……ウチなんか時代遅れってことですかね」

「いやいや、何とも言えぬ味わいがござる」

「そうですか、ありがとうございます。どうもね、自分で研いだ剃刀じゃないと信用できない感じがしましてねえ……あ、でもご心配なく。煮沸消毒はばっちりやっていますから」

「今どきは何かとうるさいですからな」

「そうなんです。あ、ひげを当たるって言えば……」

長谷川さん、先日の会話を思い出したらしい。

「若い客が増えると、会話にも困りますねえ。こないだなんか、若い客にひげを当たるって言ったら、何か当たるのか、ラッキーなんて言われちゃって」

これを聞いて伝衛門さんが噴き出している。

「もう言葉すら通じなくて大変ですよ。何か『やばい』なんて言うもんで、まずいのかと思ったらほめ言葉だって言うし。外国人と話してるみたい」

「若者を相手にするとなると、我々も少し勉強せんといけませんな」

「ほんとですな」

あははははは……。

「しかしねえ、私も驚いたんですが、あんなに若い客が次々来たのは開闢（かいびやく）以来でしたな」

「思わぬ効用で何よりじゃ」

「ほんとですよ」

「新しいことにチャレンジするのも大事ですな」

「御意！」

あははははは……。

やがてタオルが蒸しあがる。長谷川さんが蒸し器から熱々のタオルを取り出し、ちょっと冷ましてから伝衛門さんの顔を蒸す。

「熱くないですか？」

「大丈夫。いや～気持ちがいいですな」

続いて、陶製のシェービングカップで石鹸を泡立て、伝衛門さんの顔に塗りたくる。ブラシはアナグマの毛である。その後丁寧に剃刀を当てていく。剃り終わると再び蒸しタオルを取り出して残った泡を拭き去り、アフターシェーブローションを叩き込んで仕上げる。伝衛門さんはニコニコと剃り上がった自分の顔を撫で回している。

「いや～つるつるですな。まさにプロ。我輩も普段は電気剃刀での。『深剃り三枚刃・清潔水洗い！』などというのを使っておりますが、とてもここまでつるつるにはなりませんな。殊にこの顎の下側がの、難しい」

「そうですか、そう言っていただけると床屋冥利に尽きます」

「まさにグジョブですな」

あはははははは・・・。

「ではカットに行きましょうか」

「御意」

長谷川さんが、伸びてきた伝衛門さんの髪をクリップで留め、襟足の部分を中心に鋏を入れる。

「こんな塩梅でいいかな・・・前の方は伸ばしたままでいいし。じゃあまたワックス付けますね」

「御意」

使うのは勿論、例の『ウルTRASーパーハードワックス・プロ仕様』である。

「これがやっぱりいいみたいだね。若い客がみんな買ってくんですよ」

長谷川さんが伝衛門さんの怒髪を整えながら言う。

「確かに。立ち具合が一段と冴えますな」

「でしょう。でもやっぱりまだまだですねえ長さが・・・あと、二、三ヶ月はかかりそうだな」

「左様ですか」

「そうそう、色なんですけど、このヘアカラスプレーっての試してみまじょうか、金色の」

「ヘアカラスプレーとな？」

「そうなんです。これをね、ワックスで固めたあと、シューッとやるの。これならシャンプーすると落ちるそうです。ちょいとやってみまじょう。少し椅子の背を倒しますね。顔に色が着いちやうかなあ・・・生え際にコールドクリーム塗っとくか・・・よし、と。顔にガーゼを掛けときまじょう。ちょいと匂うかもしれませんが・・・」

シューッ！ 長谷川さんが伝衛門さんの髪に金色のヘアカラスプレーで色を着けていく。

「起こしますよ。今度は後ろの方。ちょいとガーゼを押さえててくださいね。クリーム、耳の後

ろにも塗っとくかね……」

シューッ！ 今度は頭頂部から襟足に向けてスプレーしていく。

「はい、いいですよ」

起き上がってガゼを外した伝衛門さんは、鏡の中に金髪の自分を発見する。

「おおっ！ まさにリンデン総帥！ 金髪ですな！」

「う～ん……なかなか感じ出てますね。これがいいや」

生え際や耳の後ろのコールドクリームを蒸しタオルで拭き取りながら、長谷川さんも満足げだ

。

「御意！ いや～これで髪の毛はばっちりですな！ よかったよかった。長谷川殿のお陰じゃ。かたじけない」

「いやなに、お役に立てて私も嬉しいですよ」

二人で盛り上がっているところへ、突然長谷川さんの奥さんが帰ってきて、裏の勝手口から声を掛ける。

「ただいま～。あら、店、開けてたの？」

「ええっ！？ かあちゃんもう帰ったの！」

「うん、思ったよりずっと早く済んじゃって。いい反物いっぱい注文できたわ。それでちょっとデパートにも寄ってきちゃった」

奥から顔を出した奥さん。手にはデパートの紙袋を提げている。今日は、森田屋のお嬢さんがデザインしてくれたしゃれたスーツに身を包み、どこの奥様かという風情だ。滅多にしない化粧も施している。地味な顔立ちの奥さんだが、これが意外にも化粧栄えがするのである。

「あら、月曜なのにお客さん？ まあ、金髪だ」

奥さんは金髪の後姿を見て、先日長谷川さんが言っていた若者が来ているのかと思ったようだ

。

「そ、そうなんだよ」

突然の奥さんの出現に、さすがの長谷川さんもうろたえている。

「！？」

ふと、奥さんと鏡の中の伝衛門さんの目が合う。

「えええ～っ！ もしかして、総帥じゃないの！？」

「これは奥様、お邪魔しております」

「どうなすったの、その頭は！」

「いや、これにはちょっと訳があってさ」

「我輩がお願いしたのでござる」

「お願いしたって……ちょっと、どうなってるのよあんた！」

行きがかり上、経緯を説明せざるを得なくなった二人。仕方なく奥さんに仔細を語って聞かせる。

「そうだったの……それじゃあこないだから若いお客さんが来るようになったのも？」

「そうなの。かあちゃんに内緒で総帥の頭やってるとこ、見られちゃったらしくてさ」

「そういうことだったんだ。どうも何だかおかしいなあとは思ってたんだけど。だって、何のきっかけもなく、若いお客さんが次から次へと来るわけないもんねえ」

「だよなあ」

「ところで奥様、この件は何卒ご内密に願いたい」

「そうなんですか？ 分かりましたよ、内緒ね。第一、総帥がそんな頭してるなんて、誰かに言っても信じないでしょうし」

「それもそうだね。想像もつかないからなあ」

「そうよ。あ、今日はね、デパートでたい焼き買ってきたの。しっぽまで餡子がぎっしりの人気の店なんだって。もう冷めちゃったかな・・・今、お茶淹れますね」

「恐縮でござる」

「あ～びっくりした！ ついにばれちゃいましたね」

「御意。しかしながら時間の問題だったのでござろう」

「それもそうですね。まあいいか、あの様子だと他にはしゃべらなさそうだし。ウチの奴、幸いなことに相撲はいつもラジオなんです。だから、その髪型、説明するのも難しいですよ」

奥さんも相撲ファンだが、ご存じのとおり内職に精を出しているの、ラジオで大相撲中継を聞いている。よってリンデン総帥の姿は見たことがないのである。

「確かに」

「それじゃあ今日はこれで流しちゃいましょうか」

「お願いいたしまする」

「三回くらいシャンプーしないとだめみたいなんです。ワックスも付いてるしね」

「左様ですか。お手数をお掛けしますな。少し費用（かかり）をお支払いせねばなりません」

「いえいえ、どうぞお気遣いなく」

「そういうわけにもものう・・・」

「ほんと気にしないでくださいよ。お陰様で新しいお客さんも増えたことですし」

「う～む・・・。そうじゃ！ 長谷川殿はお酒は嗜まれますかな？」

「嗜まれるなんて大袈裟なもんじゃありませんがちょいと晩酌くらいはね。あんまりたくさんはやりませんけど」

「ほほう・・・何が好きですか？」

「そうさねえ、やっぱり日本酒ですかね。今時分はぬる爛。夏の暑いときはビールかな」

「左様ですか。それは何より」

「酒がどうかしました？」

「いやいや、こっちの話でござる」

「それじゃシャンプーしますよ」

「御意」

シャンプーが終わり、長谷川さんがドライヤーを当てていると、奥さんがたい焼きとお茶を持って出てきた。

「ちょっと網で炙ってみたわ。ほら、皮がパリッとなって美味しそう」

「あ、香ばしい匂いがするねえ。旨そうだな」

「本当ですな」

「どうぞ上がってくださいな。あ、普通の総帥になったわ」

あははははは……。

「しかし奥様、今日は一段とお美しいですな。それに素敵なお召し物でござる」

「あらまあ、そうですか？ うふふふ……ありがとうございます。ちょっと着替えてきませぬ」

お褒めに与った奥さんは嬉しそうに奥に消えた。

「へへ……馬子にも衣装ってやつで」

奥さんの後姿を見ながら長谷川さんが小声で言う。

「いやいや、地が良いからでござろう」

あははははは……。

たい焼きとお茶を美味しくいただいた伝衛門さんは、自転車で長谷川理髪店を後にした。伝衛門さんを見送って、長谷川さんと奥さんが話している。

「ほんとに、いよよますますおかしな人だよな」

「いやあ、おかしいだけじゃないね。なかなか深いお方だよ」

「そうなの？」

「店の改装さ、ちょっと別のやり方を考えてみようかと思って」

「へえ、どんな？」

「レトロな雰囲気を残しつつ、改装する」

「れとろって何よ」

「懐古趣味とでも言うのかね」

伝衛門さんの受け売りである。

「そうなんだ。古さだけはピカイチだもんね。だけど男の人って、悪だくみしてるときってほんと楽しそうにしてるわよね」

「悪だくみ？」

「そうよ。どうも、こないだっからあんたが鼻歌なんか歌って機嫌がいいな～と思ってたのよ。これは絶対何かあるなって」

「ばれてたか。でも別に、悪だくみってわけでもないだろ」

「まあそうね。許してあげましょう」

あははははは……。

数日後のこと……長谷川理髪店にヤマネコの宅配便が届いた。箱の中には日本酒の一升瓶

が六本。送り主の欄には『林伝衛門』の名が記されていた。

その日。伝衛門さんは都心のビルにある建築デザイン事務所を訪ねていた。応接室のソファに掛けて人を待っている。やがてドアを開けて入ってきたのは、林一族の長老である右兵衛（うひょうえ）さんの孫の右京さんだ。口ひげを蓄え、マオカラーのシャツなど着こなしたおしゃれな感じの人だ。年齢は四十代半ばといったところか。

「これは右京くん、忙しいのにすまないねえ」

「伝衛門おじさんお待たせしました。お久しぶり。コーヒーでいいですか」

「御意」

「エスプレッソもできますけど」

「いや、普通ので結構」

「砂糖とミルクは？」

「ありありで」

「了解」

右京さんが傍らのキャビネットの上に置かれたエスプレッソマシンでコーヒーを淹れてくれる。

「はい、どうぞ」

「おお、いい香りじゃ。かたじけない」

コーヒーは馥郁たる香りを放って伝衛門さんの鼻孔をくすぐる。

「今日は電車ですか？」

「いや。自転車で参った」

傍らに置いた自転車用のヘルメットをポンポンと叩いてみせる。伝衛門さんは今日も愛車のピアンキに乗ってここまでやってきたのだ。

「へえ～自転車ですか。道理でスポーティーなスタイルだ」

伝衛門さんは洒落たスポーツウェアの上下に身を包んでいる。

「結構あるでしょう、ここまで」

「左様・・・ざっと10キロくらいかの」

「おじさんも元気ですねえ」

「お陰様で」

あははははは・・・。

セレンディピティ・ビルの28階にフロアがある事務所からは、はるかに富士山や大山、丹沢の山々を見晴らすことができる。今日はよく晴れて、雪を頂いた富士山がどっしりとした姿を見せている。

「いつ参ってもここからの眺めは素晴らしいですなあ」

「いいでしょう、富士山」

「まことに。日本の宝、いや、今や世界の宝ですからなあ、富士山は」

「ほんとですね。毎日見ても飽きませんよ。あ、そうそう。後でお見せしますが、あっちの事



務室の方からは、東京スカイヘブンがもう、目の先に見えるんですよ」

東京スカイヘブンとは、最近完成した電波塔の愛称である。

「我輩も来るときに自転車から見ておったが、ここからなら近いでしょうな。我が家からはちょうどくぬぎ山の陰になってしまうが、高尾山などからもよく見える」

「何しろ高いですからね。相当遠くから見えるんじゃないかな」

「左様。条件がよければ何百キロ先からも見えるとか……」

「電波塔としては世界一ですからね」

「我輩の若い頃は電波塔と言えば東京タワーじゃったが」

「そうですね」

「高いと言え、ブルジュハリファなどは八百メートルもの高さがあるとか……。人間はつくづく高いところが好きと見える」

「ほんとですよねえ。現代版バベルの塔かな」

「左様ですな」

「あ、コーヒー、冷めないうちにどうぞ」

「おおそうそう。我輩は猫舌ゆえ、ちょうど飲み頃。ではいただきます。う～ん、この香りが何とも言えん。どちらのコーヒーかの？」

「ハワイのコナ・コーヒーです。よかったらこれもいかがですか」

右京さんがチョコレートを開けて伝衛門さんに勧める。

「おお！ これはマカデミアナッツチョコレートではないか。これも旨いのう」

マカデミアナッツチョコレートも好物の伝衛門さん、ニコニコと目がなくなっている。

「どちらも、例のハワイ土産じゃな？」

伝衛門さんがいたずらっぽい表情で右京さんにウィンクする。

「ええっ！？ おじさん、何かご存じでしたか？」

「ふっふっふっ……我輩は地獄耳ゆえの」

伝衛門さんは、右京さんの子息である亮右（りょうすけ）くんの結婚式が、こっそりハワイで挙行されたとの情報をつかんでいたのである。その偵察がてら、頼みごとがあつて来たのだが……。

「いや～参ったな～内緒にしてたのに……コーヒーもチョコレートも藪蛇でしたね」

あははははは……。右京さん、頭を掻いている。

「まあ良いではないか。おめでたいことゆえ」

「まあそれはそうなんですけどね」

「右兵衛さんもお達者で何よりじゃ」

右兵衛さんは今年白寿を迎えるのだが、老いてますます盛んである。今でも蝶ネクタイなど締めてソフトを被り、ステッキを携えて豊饒（かくしゃく）と銀座の街を闊歩する。近頃はファストファッションの店などの進出が目立つ銀座であるが、それもまた時代の流れと、そういった店を探検するのも楽しみにしている。この老人なかなか懐が深いのだ。

「うちのおじいさん、もうすごいですよ。飛行機の中でもずっと食べたり飲んだり。CA（キャビンアテンダント）とは仲良くなっちゃやし。ツーショットで写真を撮っちゃったりして・・・行きも帰りも一行の中で一番元気でしたね」

「ほほう、さすが右兵衛さんじゃ」

「CAが入れ替わり立ち代わりやって来るもんで、鼻の下伸ばしっぱなしでしたからね。あれは多分に超高齢者を慮って（おもんばかって）のことだと私は理解してるんですが、わしもまだまだ捨てたもんじゃないとか言っちゃって・・・。あの分じゃ、百五十歳は堅いんじゃないですか」

「結構結構。人間、いくつになっても異性へのときめきを忘れてはいけませんな。いや、それが若さの秘訣じゃろうて」

「かもしれせんねえ」

あははははは・・・。笑った二人だが、右京さんの眉がちょっと曇る。

「しかし何しろ、肝心の亮右はまだ二十歳（はたち）ですからね」

「近頃はよくある話じゃ。早いか、極端に遅いかですな。して、花嫁さんはおいくつかな？」

「これが年上でしてね。二十四」

「ほう。姉さん女房か」

「そうなんですよ。しかも四つも・・・」

「二十四ならば、うちの伝子と同年か」

「多分」

「いやはや、うちの伝子など嫁入りはまだまだ当分先のことじゃ」

「その気配なしですか」

「全く。食い気ばかりでの」

あははははは・・・。

「で、極秘の挙式となると、もしやして『デキ婚』かの」

「ピンポ〜ン。当たりです」

「やはりのう。我輩の読みどおりじゃ」

「なんで、なるべくお腹が目立たないうちにとってことで、ハワイでこっそり。デキ婚なんて今どき珍しい話じゃないですし、ほんとはうちの長男なんで皆さんをお招きして盛大にやらなきゃいけないんですが、嫁さんの親族の方が物堅い人たちでねえ。恥ずかしいからごく内輪にして欲しいって。申し訳ありませんでした」

右京さん、深々と頭を下げる。

「いやいや、なるほどのう。近頃は『デキ婚』を『授かり婚』などとも言うらしい。子を授かるはまさに天の采配ですからな。いずれにせよめでたいことじゃて・・・して、お二人はどこで知り合われたのかの」

「亮右の奴が去年、旅先で骨折しましてね。そのとき入院した病院の看護師だったんです」

「なるほどのう・・・これもよくある話じゃ」

「何だか優しくされてコロッと参っちゃったらしくて……ちょうどその頃、前の彼女と別れたばかりだったもので」

「またまたありそうな話じゃ」

「ですよねえもう、ステレオタイプですよ。で、退院して東京に戻ってからもこっそり付き合ってたらしい」

「所謂（いわゆる）『エンレン』じゃな」

「おじさん、現代用語に詳しいですね」

「左様。流行には敏感での」

あははははは……。

「そのうち落ち着いたらご挨拶には行かせますから」

「うむ。写真なども拝見したいねえ」

「持って行かせますよ。ビデオも撮ったし」

「それは楽しみ。しかしながら、お嫁さんがおめでたとなると、仕事はどうされるんじゃ」

「それなんですよ。どっちみち働いてたのが奈良の方の病院ですから、辞めざるを得ないですね。まさか単身赴任って訳にも行きませんし。そうすると、二人とも無職な訳で。亮右は学校辞めて働くなんて言ってるんですけど、せっかく大学三年まで進んだんだから、卒業だけはしろって。今どきはちゃんと卒業したって仕事にありつけるかどうか分かりませんし、中退じゃ話になりませんよね」

右京さんが眉間に皺を寄せる。

「なるほど……したが亮右くんは確か建築学科ではなかったかの？」

「ええ。その怪我も日本建築の調査に行ってる時だったんです。まあ、卒業したらウチの事務所まで雇うって手もあるんですが、やっぱりよその釜の飯も食わせないとね。甘えちゃって本人の為にはなりませんよ」

「それもそうじゃ。して、新居はいずこに？」

「八郎さんとこのアパートにちょうど空きがあるっていうんで、そこを借りようかと。あそこならウチにも近いですし」

八郎さんというのは林一族の本家筋の当主で、本名を林八郎衛門という。だが本名は長ったらしくて面倒なので、皆『八郎さん』と呼んでいる。十畳敷き、二十畳敷きの部屋がいくつもある広大な屋敷を所有する大地主である。八郎衛門家では、今でも農業を営んでいる。例の『もっちりコロッケ』の里芋は、この八郎衛門家で作っているのだ。

「左様か。お嫁さんのご実家は？」

「これが遠いんですよ。奈良のまた奥の方の旧家なんです。そこの四女でして。それが何と、付き合ってるうちに、亮右が大和棟の調査に行った屋敷の娘だったということが分かったそうなんです。これはもう運命の出会いだって更に盛り上がっちゃったらしくて」

「なるほど、それは確かに運命的でござるな。しかしそれではお嫁さんのご実家の助力は当てに

できんのう」

「そうなんです。長女は婿を取って実家にいますし、他の姉たちも関西の方に住んでるもので。まあ、金銭的なことは別として、実際の面倒はウチで見るしか」

「しかし右京くんの家の近くなら何かと安心じゃの」

「そうですね。お産のときは里帰りすると思いますが、いずれウチの奥さんに赤ん坊を預けて働きに行くんでしょう」

「まあ看護師さんなら食えばぐれはないじゃろう。近頃は人手不足で引っ張りだこじゃからの」

「そうですねえ・・・それだけは良かったかな」

「ときに香代子さんは反対されなかったのかの」

香代子さんとは、右京さんの奥さんである。

「いやそれが、最初はとんでもないって大反対だったんですが、本人に会ってみたら気が変わりましたね。なかなか素直な気立てのいい娘（こ）だったもので。本人同士も真剣でしたし」

「それは何よりじゃ」

「実はウチに報告する前に亮右の奴、一人で嫁さんの実家に乗り込んだんですよ。お嬢さんをくださいって」

「ほほう。意外に大胆じゃな。あの亮右くんがのう」

単身、相手先に乗り込んだ亮右くん。何しろ向うの家を知っている。親にも会ったことがある。調査に行ったときにも良くしてもらった。これは好印象だったということだ。これらのアドバンテージがあって強気の行動に出たのだ。で、実際訪ねたら、何だ、あのときの学生さんじゃないかという話になった。二人の馴れ初めを聞いて両親もびっくり。これは奇遇だ、神様のお引き合わせかもしれない。座は大いに盛り上がった。そこで頃や良しと平身低頭。実は・・・と恐る恐る妊娠の事実を告げたところ、父親の態度が一変した。学生の分際で娘を妊娠させるとは不届き千万。それへ直れと、手打ちにせんばかりの勢いだったという。

「う～む、さもありなん」

「父親は厳格な人で相当頑固者らしいんですが、母親が、二人が好き合ってるならいいじゃありませんか、それが一番大事でしょうって取り成してくれたらしいんです。実は嫁さんも、母親にはこっそり打ち明けてたらしいんですね。で、亮右の奴、お嬢さんのことは必ず幸せにします。自分は建築士を目指しているの、将来は親父の事務所を継ぐ予定ですなんてちゃっかりと」

「ははははは。将来は社長夫人というわけですな」

「まあ、それで何とか許してもらえたらしいんですが、そう簡単には譲りませんよ。まだ資格も取ってないんですし」

「でも、後を継いでくれるというなら御の字ですな。右京くんもいよいよおじいさんか」

「いやですねえ。私まだ四十五なんです。ウチの奥さんが四十三。棗（なつめ）なんか、まだ十六なのに叔母さんですからねえ」

右京さん、頭を抱えている。

「あ、因みに嫁さんの名前はなつみと言います。菜を摘む、で菜摘」

「何と、これはまた棗ちゃんと紛らわしいのう」

「そうなんですよ。で、どうしたかと言うと……」

棗ちゃんは亮右くんの妹で、都内にある私立高校に通っている。菜摘と棗では紛らわしいので、みーちゃんとめーちゃんにするとか、二人の間で話し合いが出来ているそうだ。優しいお姉ちゃんができた、と、棗ちゃんも喜んでいられるらしい。どうやらここには、『小姑鬼千匹』の例えは当てはまらないようだ。

「なるほどのう。それは何より。しかし右京くん、孫はかわいいものですぞ」

「う～ん……まだ生まれてみないと何とも実感が……」

「いずれにせよ楽しみじゃな。家族が増えるのはめでたいことじゃ。少子高齢化への貢献にもなるしの。神は言われた。産めよ増やせよ地に充ちよ、と」

「それはそうですけどねえ……」

若いにもうすぐおじいさんと呼ばれてしまう右京さん、ちょっと複雑な心境のようである。「それに若い爺婆というのもいいものですぞ。元気なうちに孫と遊べるのは何よりじゃ。香代子さんなどお若く見えるからの。お子さんですかなんぞと言われたりして」

「そうかもしれませんね。まあ楽しみに待つことにしますよ」

「それがよろしい」

「ところでおじさん、今日はその話でいらしたんですか？」

「おお、それぞれ」

伝衛門さん、ぽんと膝を打つ。

「肝心のことを忘れるところじゃった。実はの、右京くんに折り入ってお願いがござっての」

ハワイの話がきっかけで脱線してしまった伝衛門さんは、ここでやっと本日の来訪の目的を思い出した。右京さんの方へ身を乗り出す。

「何でしょう」

「ある店の改装を手伝って欲しいのじゃが」

「ああ、仕事の話でしたか」

「御意」

「どんなお店です？」

「戦前に建てられた古い理髪店」

「床屋さんですか」

「御意」

「依頼主はどんな希望をされてるんですか？」

「昭和モダンをコンセプトにした改装を希望されておる」

「ああ、つまり、雰囲気は今のままで、手を加えるということ？ リノベですかね」

「そのとおり。何しろ年代物ゆえ傷みも出ておるんじゃが、単なる改装で新しくするのはいかにももったいない。今の雰囲気のまま、更に素晴らしいものにしてもらいたい。しかしながら我

輩が大変お世話になっている店ゆえ、何卒格安でお願いしたいんじゃ」

「予算はどのくらいを考えていらっしゃるんでしょうね」

「それなんじゃが、一度現地を見て話を聞いてくれまいかの。火曜日の夕方など都合がよろしいそうじゃ」

「分かりました。ちょっと待ってくださいね。火曜日、火曜日の夕方と・・・イベントはなさそうだな。ちょうど空いてますね」

右京さんは胸のポケットからサクセスフォンを取り出すと、カレンダーでスケジュールをチェックする。

「おおっ！ それはもしやして、近頃話題のサクセスフォンではないか」

「そうです。便利ですよ、これ。ポケットに入るコンピュータって感じで」

「どれ、ちょいと拝見・・・」

伝衛門さんは右京さんからサクセスフォンを受け取ると、タッチパネルを人差し指でタップし、感触を確かめる。

「ふ～む、なるほど。なかなか動きも良さそうじゃな。我輩も次に携帯を買い換えるときにはこれをと狙っておるんじゃ」

「おじさんも結構新し物好きですね」

「左様。先ほども申したとおり、流行には敏感での」

あはははは・・・。

「しかしながら古いものも大切にしておりますぞ」

「そうですよねえ。おじさんとも古いもんな。築百年くらいですか？」

「先々代の伝衛門、我輩の祖父が分家して今の家を建てたのが、明治の終わり頃と聞いておりますからな。多分そのくらい。途中で増改築はしておるがね」

「そうだったんですか」

「陽子さんが嫁に来るときにの。その頃はまだ右京くんは学生だったじゃろう」

陽子さんとは、伝衛門さんの子息、伝蔵さんの奥さんである。

「そうか・・・きっと三十年近く前ですよね」

「うむ。それゆえ今回は拙宅の耐震診断もお願いしたいんじゃ」

「なるほど。それじゃそっちの方も手配することにしましょう。その床屋さん、お名前は？」

「長谷川さんじゃ」

「長谷川さんね・・・それじゃ、一番早い次の火曜日でいいですね」

「御意。先方には我輩からお伝えいたす。よろしく頼みましたぞ」

「了解です。あ、おじさん、良かったらチョコレート、お持ちになりますか。たくさんありますので」

「それではいただいて行こうかの。おおそれぞれ、東京スカイヘブンも見せていただく」

「ああ、そうでしたね。こっちです、どうぞ。あ、今日は天気がいいから筑波山や男体山も見えるとしますよ」

「それは楽しみ」

目の前に聳える東京スカイヘブンと、遠く筑波山や男体山の勇姿を堪能した伝衛門さん。マカデミアナッツチョコレートを三箱お土産に、ニコニコとピアンキに跨って家路を辿るのであった。

数日後、伝衛門さんが右京さんを伴って長谷川理髪店にやって来た。

「いやあ、これは看板建築か。なかなかレトロで味わい深いお店ですね」

「そうじゃろうそうじゃろう」

伝衛門さん、我が意を得たりとニコニコしている。

「御免……」

「あ、総帥こんにちは。先だっては結構なお酒をたくさんいただきちゃいまして。それから今度は私が留守の間にチョコレートまでいただいて」

「いやいや。お口に合いましたかの」

「合いましたなんてもんじゃありませんよ。ありゃあいいお酒ですねえ！ 特に『飯出の春』。こいつがたまりませんね。ご馳走様でした。チョコレートはウチのが好物だって喜んでました」

「それは何より。あそこの酒蔵には少々肩入れをしておりますな」

「そうですか。いやあいいお酒を教えてください」

「気に入っていただけて我輩も嬉しい限り。あ、長谷川殿、こちらが先日お話した親戚の右京くんじゃ」

伝衛門さんが後ろに控えていた右京さんを紹介する。

「初めまして。林右京と申します」

右京さんは『林右京建築デザイン事務所』と印刷された名刺を取り出して長谷川さんに手渡す。

「こりゃあ恐縮です。私がこちらの総帥にお世話になってます長谷川です。私は名刺はないんですが」

「どうぞよろしく願いいたします」

「こちらこそよろしく願いしますよ」

「なかなかいいお店ですねえ」

右京さんが店内を見回しながら言う。

「いやあ、単に古いだけなんですけどね」

「築何年くらいですか？」

「ざっと八十年は越えてますかね。総帥が、なかなか捨てがたいとかおっしゃってくださるもんで」

「うむ。その古さが何とも言えん味わいを醸し出しておりますからな」

右京さんが伝衛門さんを振り返り、小声でささやく。

「おじさん、『総帥』って呼ばれてるんですか？」

「左様」

「何で？」

「ふっふっふ．．．．いろいろと事情がござっての」

「へえ．．．．？」

右京さん、総帥の由来はご存じないらしい。

右京さんは長谷川さんの案内で店内を見て回り、改修が必要な箇所などをチェックしてメモを取る。

「柱と梁は耐震補強をすることで．．．．この、床の部分は張り替えた方が良さそうですね」

長谷川理髪店の床は古いピータイルで、あちこちにひび割れや欠けが生じている。

「これも、大分前に張り替えたっきりで、かれこれ四十年は経ってますかねえ。建てた当初は普通のタイルが張ってあったんです」

「そうですか．．．．タイルね．．．．」

「また昔のタイルに戻すって手もありますかね。レトロってことで」

「そうですねえ．．．．タイルだと結構足元が冷えると思いますよ。それに滑るし」

「そうか．．．．今思い出しましたが、前に張り替えたのも親父が転んで骨折してからでしたね。私ももういい年ですからね、あんまり冷えるのもねえ。骨折も怖いし」

「フローリングにしましょうか」

「フローリング？」

「板張りです」

「でも、板張りだと水回りが腐りませんかね」

「最近はね、耐水性を高めた素材が出てるんで、水周りも大丈夫ですよ。木だと温かみがあるし、お店の雰囲気にも合うんじゃないかな。コルクでもいいんですけど、ちょっと値段が張りますね」

「あんまり高いのもねえ。それじゃあ木の床にしましょうか」

「了解です。水周りはどうですか？」

「これも古くってねえ。創業以来取り替えてないですね」

「そうすると、管も結構詰まってきたと思うし、水栓や洗髪ボウルも交換した方がいいかもしれませんね」

「そう言えば、洗髪したときの水の引きもあんまり良くないですねえ．．．．極力髪の毛が流れないようにネットの細かいので受けてはいるんですけど」

「多分排水管が動脈硬化を起こしてるんでしょう」

「なるほど．．．．人間とおなじですね。蛇口なんかは今は真鍮（しんちゅう）ですけど、やっぱりステンレスとかがいいんですかね」

「いやあこの、レトロな感じは残した方がいいと思いますよ。今はレトロな感じの蛇口なんか結構人気で出てますから」

「う～ん．．．．難しいところですねえ。今どきはシャワーなんか出るステンレスの蛇口が普通なんですよ」

「ちょっと調べてみますが、真鍮のレトロな奴でもシャワーになってるの、あるんじゃないかな」



」

「そうですか、あるといいねえ。この、昔の蛇口も好きなんだよね」

長谷川さん、愛用の古びた蛇口のコックを撫でている。

「ずっと大切に使ってこられたんでしょうね……」

右京さんも、磨かれていい味を出している蛇口を見つめる。

「本当にいろいろなものが味わい深いですな」

伝衛門さんもニコニコと二人の様子を見つめる。

「この、押し開き窓の形はこのままだいいと思うんですが……」

「ああ、この窓ね。この木枠も大分傷んできちゃったねえ。しばらくペンキの塗り替えもしてないしね」

「窓枠を交換しましょうか。あれ、このガラスはもしかして創建当時のままですか？ 波打ってますね」

「割れちゃったところ以外はね、昔のまんまで。この辺は幸い空襲にも遭わなかったんで」

「はあ……これはもう歴史遺産ですね。ガラスをこのまま活かして窓枠と真鍮の金具だけ交換できるか、ちょっとガラス屋に聞いてみましょう。壁と天井はどうですか？」

「あ、壁と天井はねえ、床を張り替えたときに安物の壁紙貼っちゃったんですよ。そのときはちょっとおしゃれかなと思って。ほら、もうずいぶん剥がれてきちゃった。染みも出てるし」

「今度は漆喰にしてみましょか」

「あ、元は漆喰だったですよ、確か」

「それじゃ、今の壁紙を剥がして、下の様子を見てみましょう。多分糊を剥がして上塗りをすれば大丈夫じゃないかな……。それと、照明はどうですか？」

天井を見上げると、ごく普通の二十ワットくらいの蛍光灯がセットされたものが、三枚並んだ鏡の上の方に下がっている。鏡の上にはもう少し小型の蛍光灯が付いている。

「それじゃ味気ないですかね。昔々はこう、電球が中に入れて、全体が白い曇りガラスの傘で覆われてるのが下がってたんですが……」

「そういう形で電球色のLEDランプの入るものがありますよ。それだとかなりレトロな雰囲気が出せますね」

「ああ、そんな形ののにできるといいですねえ。懐かしいなあ」

「全体をグローブで覆う形のにするとちょっと暗いかもしれませんね。この鏡の上の蛍光灯を、真鍮の傘のランプに変えるといいかもしれませんね」

「あ、それだと明るくなるねえ」

「そうですね。鏡はちょっと古びてますが、味わいがあるのでこのままでもいい気がします。このカウンターもタイルはそのまま、木の部分だけ塗り直せば行けそうですね……表もいいですか？」

「どうぞどうぞ」

三人は店の外に出る。

「この、腰壁のタイルは残した方がいいですね。いい味が出てます」

その前には、長谷川さんが大切に育てている植物の鉢植が花台の上に並べられている。このところ続いた暖かさに誘われて、盆栽仕立ての木瓜（ボケ）が、象牙色に朱鷺色（ときいろ）が混じった可憐な花を咲かせている。その隣では立浪草（タツナミソウ）が紫と白の波頭を立てて咲き誇る。他の鉢からも新しい芽や蕾が伸びてきた。深山苧環（ミヤマオダマキ）や碇草（イカリソウ）が咲くのも間近なようだ。

「ちょっと欠けたりしてるとこもあるんじゃないかな・・・あ、ここ、ここ」

そんな話をしているところへ、長谷川さんの奥さんがお使いから帰ってきた。

「ただいま～。あら、お客さん？」

「あ、かあちゃんお帰り。あれ？ 言ってなかったっけか」

「あらまあ総帥じゃないですか。先だってはお酒をたくさんいただきちゃって。それからチョコレートも。どうもご馳走様でした」

「なんのなんの」

「かあちゃん、こちらね、総帥のご親戚の方で、改装の相談に乗っていただいているところ」

「ああ、そうなの。前に言ってた・・・ええと・・・メトロとか？」

「メトロじゃなくてレトロね」

「そうだった？」

長谷川さんも奥さんも、英語は苦手である。

「初めまして、長谷川の家内です。このたびはお世話になります」

「私、建築事務所をやってます林と申します」

「何ですかねえ、こんな古い店ですけど、どうぞよろしくお願いしますね」

奥さんが頭を下げる。

「いやあ、私も建築に長年携わってますが、なかなか味わい深い建物でやりがいがあります。勉強になりますよ」

「まあそうですか。ありがとうございます。今お茶でも淹れますので」

「恐れ入ります。ところで長谷川さん、お店の看板はどうなさいます？」

「それなんだけどねえ・・・店の名前、変えようかと思ってるんですよ、この際」

「へえ、何て？」

「ばーばーはせがわ。ひらがなでね」

「そうですか」

右京さんが見上げる先には、『長谷川理髪店』と右から書かれた古い看板が掛かっている。

「それじゃ、看板のデザインも考えないといけませんね」

「思い切ってネオンサインとかどうですかね」

「あ、英語だったらいいかもしれませんよ、雰囲気が出て。で、日本語のは小さめの板に彫って下げるとかね」

「なるほど、板に彫るねえ・・・」

「今日はほんの下見だけです、改修ポイントなんかはまとまりましたら、また伺います」

「で、肝心の費用のことなんですが・・・」

「あ、それはおじさんにも頼まれてますんでご心配なく。格安でやらさせていただきます」

「とおっしゃっても、今見ただけでもいろいろ手直しする箇所がありそうですね」

「こういう建築物の改装は私も初めての経験なので、勉強のつもりで考えてみます。ほんとに材料費程度で・・・ざっとした見積もりが出ましたら見ていただきますので、その金額によってまた改修のやり方を見直してもいいと思いますよ」

「そうですか。ありがとうございます。どうぞよろしくお願いしますね」

「承知いたしました。また伺う際にはお電話いたしますので」

「そうだ、電話番号・・・」

「あれですよね」

右京さんが看板を指差す。看板には局番が三桁の電話番号が書かれている。

「あ、あれ、昔のまんまで・・・頭に三を付けていただいて・・・」

「了解」

右京さんがサクセスフォンを取り出して登録する。

「それじゃどうぞ、中でお茶でも」

「恐縮です」

「今日はこんなものしかなくて・・・このチョコレートも総帥からのいただきものなんですけど、よかったら上がってくださいな。もう、あんたったら言っといてくれれば辰巳堂で何か買ってきたのに」

「いやあごめんごめん」

奥さんがお茶と一緒に菓子鉢に盛って出してきたのは、辰巳堂のざらめがけのお煎餅と、マカデミアナッツチョコレートである。

「あれ・・・？」

右京さんが伝衛門さんの顔を振り返る。

「美味しいですなあ、ハワイ土産のチョコレートは。うふふふふふ・・・」

「どなたかハワイにいらしたんで？」

「左様。ちと知り合いがの。さ、右京くんも遠慮せずいただきなさい。旨いぞよ」

右京さん、呆気にとられている。伝衛門さんはニコニコとチョコレートに手を伸ばすのであった。

## 『爆発Hair始めました』

---

その日。田島くんは、筒型の図面ケースを肩から提げてくぬぎ台図書館へやってきた。入り口で、カウンターの中に座っている林さんに声を掛ける。

「えっちゃん」

田島くんは林さんのことを『えっちゃん』と呼んでいるのだ。

「あ、田島くん。今日はどうしたの？ 何か調べ物？」

「今日はね、ちょっと佐々木さんに用事があった」

「そうなの？ じゃ、呼んでくるからちょっと待ってて」

「うん」

林さんはくるりと後ろを向くと、事務室に駆けていった。しばらくして佐々木さんと一緒に戻ってくる。

「田島さんこんにちは。私に用事ですか」

「あ、佐々木さんこんにちは。例のものが出来たんで、ちょっと佐々木さんにも見ていただこうかと・・・試作品なんですけど」

田島くんが図面ケースの蓋をポンと開けて取り出したのは、長谷川さんから頼まれていたポスターである。

「ああ、例のポスターだね？ どれどれ・・・」

田島くんが広げたポスターを、佐々木さんの横から林さんも覗き込む。ポスターには、真っ赤な髪のウルトラサイヤ人が・・・そして、『爆発Hair始めました』の文字。

「すごい！ これ、田島くんが描いたの？ へえ～カッコイイじゃない！ モデルは田島くん？」

「顔はね」

林さんは認識していないのだが、こう見えて田島くんはなかなかのイケメンである。

「ふ～ん・・・髪型が、ちょっとあの、アニメのウルトラサイヤ人にも似てる気が・・・」

「これは一応僕のオリジナルなんだけど。何しろこんな頭の知り合いがないもんで、確かにウルトラサイヤ人もちょっと参考にしたけどね」

「う～ん、さすがは田島さんだ。よく描けてるな。髪の毛の色は違うけど、私が見た若者にもそっくりだよ。なかなかカッコイイねえ」

「恐れ入ります」

絵を描くのが特技の田島くん、お褒めに与りニコニコである。

「確かにカッコイイかも！ 田島くん、これどこかに貼るの？ まさかしにあくらぶじゃないよね」

「まさか。駅前の長谷川理髪店」

「あれ？ ええっと、そこって確か佐々木さんが行ってる床屋さんでしたよね」

伝衛門さん、リンデン総帥の扮装の件は家でも隠密裏に遂行しているらしく、林さんは気が付いていないらしい。

「そうだよ。あそこのご主人がね、最近こんな髪型を始めてね。で、宣伝のため田島さんにポスター描いてもらったらって私が勧めたんだ」

「へええ～そうだったんですか。そんなおしゃれなお店だったの？」

「いや、おしゃれというか、ものすご～く古い店でね。確か戦前の建物じゃなかったかな。それこそ骨董品みたいな」

「ええ～！？ そんなお店でこんな髪型を！」

「そうなんだよ。だからポスターでも貼って宣伝しないと、誰もそんなこと気が付かないだろうと思ってね」

「なるほどね～。あれ？ 田島くんもそこに行ってるの？」

「ううん、長谷川さんはしにあくらのメンバーなんだ」

「そうなんだ・・・あれ？ ええっと、その人って確か、ウチのおじいちゃんと一緒に将棋を担当する人じゃなかったっけ・・・」

「そうだよ」

田島くん、林さんが何かを嗅ぎ取ったかの一瞬ギクリとする。えっちゃん、こう見えて鋭いところあるからなあ・・・。

「もしかして、その髪型って・・・ウチのおじいちゃんと関係があるのでは？ 何だか前におじいちゃんが言った気がする。床屋さんがいて何よりとか」

林さん、腕を組んで考えをめぐらしている。

「そうだった？」

田島くん、とぼけている。

「そういえば最近、おじいちゃん髪伸ばしてるし・・・何だか、由井小雪を目指しておるとか何とか言ってたけど・・・。怪しい。また何か企んでいるのでは？ 田島くん、何か知ってるでしょ」

林さんがカウンターから出て田島くんに詰め寄る。

「いやあ別に」

田島くんはわざとらしく壁の時計に目をやる。

「あ、いけね、もうこんな時間！ それじゃ、作戦会議が始まっちゃうから行くね！」

田島くんは大急ぎでポスターを丸め、図面ケースに突っ込む。

「それじゃ佐々木さん、お邪魔しました～！」

「いやどうも」

「うん？ いや、待て！ 今日は作戦会議の日じゃないでしょ！？」

林さんが尚も詰め寄る。

「ばれたか」

「お主逃げる気か！」

田島くんは入り口に立ちふさがる林さんの横をすり抜けて、図書館の前に停めてあった自転車に飛び乗ると、区役所目指して猛スピードだ。

「お～危なかった」

今日は別件でこの近くまで来た田島くんである。ついでに佐々木さんにお目に掛けようとポスターを持参したのだったが、この件は伝子（でんこ）にも内密にと伝衛門さんから頼まれている。男と男の約束である。相手がいくらえっちゃんでも、しゃべるわけには行かないよな……。

ちなみに『伝子』とは……。林家に代々伝わる『伝』の字が子孫に伝わらないことをイカに思った伝衛門さんが、林さんに付けようとした名前である。林さんのお兄さんが誕生の折には、伝衛門さんが子息の伝蔵さんに拝み倒され、哲哉くんに決まってしまった。次の子どもが生まれる折に、やはり是が非でも『伝』の字を……と考えた伝衛門さん。男子ならば『伝次郎』、女子ならば『伝子』とするようにと伝蔵さんに申し渡した。それを聞いた嫁の陽子さん、それだけは勘弁してくださいと伝衛門さんに泣いて頼んだとか……。それで『悦子』さんに決まったのだが、諦めきれない伝衛門さんは今でも林さんのことを『伝子』と呼んでいるのである。伝衛門さんが次に狙っているのは曾孫（ひまご）の命名である。

こちらはくぬぎ台駅前商店街にある『三河屋』。この店はこだわりの品揃えで知られる酒屋である。そこに、一升瓶の空き瓶を抱えた長谷川さんがやってきた。

「こんにちは～」

「あれ長谷川さんこんにちは。酒の注文かい」

店主の大久保さんが尋ねる。大久保さんは去年からくぬぎ台駅前商店会の会長を務めている人だ。

「そうなんだけど、お宅にここの酒、ある？」

長谷川さんが持ってきたのは、多喜方の『飯出の春』の空き瓶である。

「どれどれ……う～ん、知らない醸造所だね」

「やっぱりそうか。あんまり東京じゃ売ってないのかな……。三河屋さんのことだ。あればきっと勧められてるよな」

「これ、どうしたの」

「いや、こないだいただいたんだけどね、これが滅法いい酒でさ」

「へええ……あ、この酒、無農薬栽培米で作ってるんだね」

大久保さんがラベルを見て言う。

「ああそうなの？ 知らなかった」

「何か、こっちの方の醸造所は応援したくなるよね」

「そうだよねえ……。きっと、苦労してると思うよ。あ、だから送ってくれたのかな？ この酒もね、こう、コクがあって切れがあるってのかな。実に旨いの」

「へえ～そりゃいいね。俺も飲んでみたかったねえ」

旨い酒を探求している大久保さん、残念そうな顔をする。

「あ、そうか。ウチにまだあるの。飲みに来るかい？」

「え？ いや～酒屋がよそで酒呼ばれちゃ面目ないよ……」

と言いつつ、大久保さんは『飯出の春』の空き瓶を撫で回している。

「いいじゃないの。今晚よかったら」

「そうかい。それじゃせっかくだからお邪魔するか」

誘われた大久保さん、相好を崩して嬉しそうだ。

「どうぞどうぞ。きっと人気が出ると思うんだけど」

「そいつは楽しみだねえ。この空き瓶はウチで引き取らせてもらうね」

「いいの？」

「もちろん。はい、五円ね」

「悪いね。いやあ一升瓶が六本も届いたもんだから、最初は醤油かと思ったの」

「へえ、何で？」

「前にさ、建前に呼ばれたとき一升瓶二本括ったの持たされてさ。てっきり酒だと思って重いけどホクホクしながら帰ったら、何と醤油だったのよ」

「ははあ。そりゃまたがっかりだったね」

「でしょ。今どき醤油の一升瓶なんてなかなかお目にかからないからなあ。かあちゃんは喜んでたけどね。そんなわけでそれから一升瓶には用心してんの」

「一升瓶がトラウマになってるわけだ」

「寅午（とらうま）？ 丑寅（うしとら）なら知ってるけど、寅午も何かあったっけか」

「英語だよ。心の傷みたいなものだね」

「何だ英語か・・・そう、俺の心は深く傷ついたのよ」

あははははは・・・。

「お宅はさ、こだわりの酒置いてるでしょ。やっぱスーパーなんかとは一味違うよね」

「俺もねえ暇があると、きき酒会とか顔出して、いい酒発掘するのが楽しみなんだよ」

「隠れた名品かい」

「そんなとこだ。旅先でも古い酒蔵なんか探したりね。いい酒に出会ったときは、ちょっと感動するね」

三河屋の店内には大久保さんの手による墨で書いた銘柄表が貼ってある。独特の味わいのある筆遣いだ。その銘柄表には酒の名前と産地、醸造元などの他に大久保さんのこだわりのコメントつきである。その時期におススメの酒や新規入荷の酒はポスターに描いて貼り出していて、その酒に合うつまみなどもさりげなくセットにして置いている。店内には、気軽に試飲ができるよう小さなカウンターも設え（しつらえ）である。大久保さんがそこにある木製のツールを長谷川さんに勧める。

「まあ、ちょっと座ってよ」

「悪いね」

「今はこのご時勢だろ。安売りの量販店なんかに押され気味だけど、ウチはウチなりのこだわりで仕入れてるもんだから、結構お客さんも来てくれるんだよね」

「だろうねえ。客の好み、知ってるもんなあ。お宅で勧められた酒は外れた例（ためし）がないもんな」

「そう言ってくれると嬉しいなあ。それにほら、辰巳堂さんとマルセイ。この頃一段とすごい人気でしょ。近頃は電車に乗って買いに来る人も増えてるらしくて。あそこに来たお客さんも結構流れてくるんだよ。奥さんにくっついてきた旦那さんとか、爆弾メンチ目当ての若い人とかさ。メンチやコロッケに合う酒ありますかなんてね」

辰巳堂とマルセイは、テレビのルポで取り上げられてからますますその人気に拍車がかかっている。もともとのファンにとっては迷惑千万な話なのだが、長蛇の列が更に延々と続くようになってしまった。

「それでもきちっとオリジナルの味は守ってるから大したもんだよね」

「そうだよなあ。どっちもほんとに旨いよね」

長谷川さんがうなづく。

「うん。何でも、一日に作る数は大きく変えないっていうポリシーでやってるらしいよ。たくさん作ればそれだけ売れて儲かるだろうけど、味の保障ができなくなるからね」

「なるほど。だから完売御礼とか本日売り切れとか札を出すわけだ」

「まあ、遠くから人が来るのは土・日が多いらしいけどね」

「電車に乗ってまで買いに来るってすごいよなあ」

「ほんとだね。でもその影響以外に、ウチもこのところ若い人が増えてる気がするんだ」

「へえそうかい」

「多分、ブログとか見て来てくれてるんじゃないかな」

「ぶろぐ？　ぶろぐって何？」

またナゾの言葉だ。ついた一ならちょっと知ってるんだけど。

「う～ん・・・何て訳すのかな。ウェブ上の日記みたいな・・・」

「うえぶじょうって？」

パソコンなどにトンと縁のない長谷川さんである。ちんぷんかんぷん・・・大久保さんの話はハードルが高い。

「ホームページって分かるよね？」

「あ、何か聞いたことあるねえ。コンピューターで何かやるんでしょ」

やっと、どこかで聞いたことのある言葉が出てきた。ええっと、どこで聞いたんだっけ・・・？

「何か聞いたことあるって、やだなあ。ウチの商店街でも今取り組んでるところじゃない」

「そうだっけ？」

「そうだよ。俺もね、三河屋のホームページの中で日記みたいの書いてるんだ」

「三河屋さんの日記・・・？　それを人に見せるの？」

日記なんか人様に見せるかねえ・・・長谷川さん、半信半疑である。

「うん。店の日記というか、酒に関することとかいろいろ書いてるんだ」

「へえ～そんなことしてるの。ハイカラだねえ」

と言いつつも、長谷川さんにはその中身が想像できない。コンピューターの中の日記をどうやって知らない人に見せるのだ？



「ほら、これがウチの・・・」

大久保さんがカウンターの上に置いてあるノートパソコンを開き、ページを立ち上げて長谷川さんに見せる。長谷川さん、ポケットから老眼鏡を取り出して覗いてみる。

「へえ・・・これがそうなの？ 俺にはあんまし関係ないなあ」

パソコンなど触ったこともない長谷川さんは、あまり興味を引かれない様子だ。

「いやいやいや。長谷川さんにも関係大有りだよ」

大久保さんが長谷川さんの鼻先に人差し指を突きつける。

「ええっ！？ 何で？」

「さっきから言ってるけど、今、くぬぎ台駅前商店街の共同ホームページを作ってるのは知ってるよね」

「はあ・・・」

「はあ・・・って、さては会報見てないでしょ。もちろん長谷川理髪店にも参加してもらうんだよ」

「まさか！」

「そのまさかだよ。前に何回もアンケート取ってやることに決まったじゃない」

「そうだったか・・・」

長谷川さんは前に配られた会報を思い返してみるが、興味のないことだったので読み飛ばしていたらしい。

「それにしたって、俺、コンピューターなんか触ったこともないよ」

長谷川さん、自分の知らないところで思わぬ話が進んでいるので魂消ている。もう大分前からその話は進んでいたのだが・・・。商店会の全会員にアンケートを取り、理事会で諮って共同ホームページの立ち上げが決まった後、折に触れて進捗状況なども会報で知らされていたのだが、自分には関係ないところに読んでいなかったのだ。それが自分にも関係があるって？ コンピューターで何かするって？ 冗談でしょ。

「俺にそんな才能あると思うかい」

「大丈夫。ページの作製と管理は俺も手伝うからさ。そしたらね、結構若い人なんかも見てくれるから、お客さんも増えるんじゃないかって。せっかく行列のできる人気店もあることだし、そこからリンクを貼ってあちこち覗けるようにね」

「??? 俺にはさっぱり分かんないけど、よろしく頼むね」

「うん。手取り足取り教えるからさ、長谷川さんも覚えてよね」

「いや～自信ないなあ・・・。この俺がコンピューターねえ・・・。でも、確かに、今どきの人は車なんかで遠くのスーパーまで行っちゃうし、ウチのお客さんも九割方お年寄りだもんなあ。若いお客さんが増えてくれると嬉しいよねえ」

「うん。お年寄りも大事だけど、将来を考えるとやっぱり若い人を呼び込まなきゃね。それで今、森田屋のお嬢さんがページのデザイン考えてくれてるんだ」

「あ～あ！ あの人は若いのにやり手だからなあ」

「何しろセンスがあるからね。美大出はやっぱり違うよ」

「そうそう。ウチのかあちゃんもさ、あの人のお陰でこの頃仕事が増えてね。大忙しよ」

「そりゃいいね」

「水を得た魚ってのはああいうのを言うんだな。もう、嬉々として内職に励んでるよ」

「へえ～すごいじゃない。それにほら、隣の駅にも大学が引っ越してきたでしょ。東京平成大学」

くぬぎ台の隣の駅である日向平には、以前は大規模な機械部品工場があったのだが、生産拠点を海外に移したため、その移転跡地に都心にあった大学がキャンパスを開設し、引っ越してきた。

「ああ、そうだったね。略せば東大！」

「あそこの教授に知り合いがいてさ」

「そうなの。三河屋さんも顔が広いからなあ」

「その人とね、いろいろ面白いことしようって企んでるんだ。ホームページ以外にもね」

「どんな？」

長谷川さん身を乗り出す。

「ふふふ・・・形が見えてきたら教えるよ。まだ内緒」

「ふ～ん、何だろうね」

「まあ楽しみにしててよ」

「分かった。まあ、その大学のせいでもないんだろうけど、実はウチもさ、この頃何だか若い客が増えてるんだよ」

「長谷川さんとも？」

「そうなの。もう次から次へと。今までお年寄りが九割だったのが、八割五分くらいにはなったんじゃないか？ でもあの若いのはどう見ても大学生って感じじゃないなあ」

長谷川理髪店には、先日の紫色の髪 of 若者の後にも、ちょくちょく若者が出入りしているようだ。

「へええ～すごいじゃない。何かあったの？」

「実はね、この頃若者向けの頭なんか始めてさ」

「どんな？」

「こう、爆発してるみたいなの」

長谷川さんが怒髪を手で表現してみせる。

「うわ～そりゃまた。驚いたね、そんなのもやってるの」

「ちょっとワケありでさ。試してるとこ見られちゃったらしいんだな。こないだなんかほら、ニワトリのトサカみたいな、何てったっけ・・・」

「ニワトリのトサカ・・・？」

大久保さん、頭の中にニワトリを思い浮かべてみる。

「モヒカンかい？」

「そうそう、それぞれ。それにしてくれってんでさ、参っちゃったよ。色もさ、アッシュ系とか何とか言われて、染料もいろいろ揃えたりして」

「へえ～！ あの長谷川理髪店でそんな頭ねえ・・・ちょっと想像できないね」

「でしょ？ だからポスターなんかも貼って宣伝しようってことになって・・・髪型も、ヘアカタログなんか見て勉強してんのよ。それでね、この際だから店もちょっと改装しようかと思ってるの」

「じゃあ、ぐっと今どきの感じにするわけだ」

大久保さん、カウンターから身を乗り出す。

「いやいやいや」

今度は長谷川さんが、大久保さんの目の前で人差し指を振ってみせる。

「え？ 違うの？ どんな感じにするの」

「レトロな雰囲気を残しつつ改装する」

『レトロ』がこのところの長谷川さんのキメ台詞である。

「レトロって・・・へえ、ずいぶんしゃれたこと言うねえ。はあ、レトロねえ・・・」

大久保さん、しきりと感心している。

「懐古趣味とでも言うのかね」

またまた伝衛門さんの受け売りである。

「長谷川さんにそんなセンスがあったとはね、驚いたよ」

「でしょ？ な～んて、俺が思いついたんじゃないのよ。俺もさ、最初は普通に新しくしようかなって思ったんだけど、あるお方のアドバイスでね。あの、昭和モダンな雰囲気が捨てがたいとか言われちゃってさ」

「そうなんだ。確かにあの店を普通に新しくするのはもったいないね」

大久保さんも納得の様子。

「でしょ？ で、そのお方のご親戚で設計事務所やってる人がいてね。相談に乗ってくれてるの」

「そりゃ良かったねえ。楽しみじゃない」

「うん。どんな風になるかと今からワクワクしてるの」

「いいねえ。それじゃ、長谷川理髪店のホームページは、店が新しくなってからにするかい」

「いや、まだ暫く先だからとりあえず今のまんまで作っとくよ。その間にもお客さん増えるかもしれないでしょ」

「お！ やる気が出てきたね」

「へへへ。それから店の・・・」

そこまで話したところへ別のお客さんが入ってきた。

「あ、いらっしゃい」

「お、邪魔しちゃったね。それじゃ待ってるから」

「店閉めたらお邪魔するよ」

「じゃあ後でね」

その日の六時過ぎのことである。田島くんが自転車で長谷川理髪店にやってきた。

「こんばんは～」

「あれ田島さん、こんばんは」

「今大丈夫ですか？」

「見ての通りお客さんいないからね。入って入って」

「それじゃお邪魔します。今日は例のものお持ちしたんですよ。ちょっと描いてみたんで」

「あ！ もしかしてポスター？」

「そうです」

「いや～悪いねえわざわざ」

「いえいえ、早い方がいいかなと思って・・・試作品ですけど」

田島くんは、図面ケースから『爆発Hair 始めました』のポスターを取り出し、長谷川さんにお目に掛ける。

「こんな感じなんですけど・・・」

「ああっ！ すごいねえ！ カッコイいなあ・・・う～ん・・・いいねえ！ この『爆発Hair』ってのも！」

ポスターは長谷川さんのイメージどおりの仕上がりようだ。ポスターを見てニコニコ悦に入っている。

「そりゃあ良かったです」

田島くんもお褒めに与りニコニコだ。

「田島さん、まるでうちのお客さん見て描いたみたいだよ」

「そうですか？ サイズ、これで良かったですかね」

「これだと、ちょうどその、ウィンドーのガラスにぴったりじゃないかな・・・」

長谷川さんが窓のガラスにポスターを合わせてみる。

「ほら！ ぴったりだ。さすがだねえ、田島さん」

「良かった～。ダメだったらまた描こうと思ってたんですよ。一枚でいいんですか？」

「そうさねえ・・・とりあえず一枚貼ってみて、様子を見るかね。いやあ、ありがとうございました」

「いえいえ、こんなので良かったらいつでもどうぞ」

「助かります」

「それとですね、長谷川さんのお店でやってらっしゃるか分からないんですけど、今、ツーブロックっていう髪型も若者に結構流行ってるんですよ。今度そのポスターも描いてみまじょうか」

「ツーブロック？ ああ、そう言えばカタログにそんなのも載ってたなあ。まだお客さんから頼まれたことはないけどねえ。そうだ！ 田島さん、良かったらそのモデルになってよ」

「僕ですか？」

「あれだったら、お役所の人でも行ける髪型じゃない？」

「まあそうですね。それじゃ、考えときます」

「頼むね。あっ、そうそう」

長谷川さん、ポンと手を打つ。

「田島さん、今日これから予定ある？ 金曜日だけど」

「いや、今日は特に・・・もう帰るだけですけど」

「それじゃちょうど良かった。今から友達と一杯やるとこなの。酒はいける口？」

「う～ん、お酒にもよりますけど」

「じゃあ日本酒は？」

「うわ～！ 僕、日本酒は天敵なんです」

「あらら、何で？」

「前に悪酔いしてひどい目にあっちゃって・・・もう、二日酔いで死ぬかと思いましたよ。それ以来日本酒は天敵です」

「そりゃあ残念だな・・・ちょいといいお酒があっさ。一緒にどうかと思ったんだけど」

「すいません。せっかくですけど遠慮しときます」

「それじゃまた別の機会にね」

「ぜひ。それじゃ今日はこれで失礼しますね」

「悪いねえせっかく届けていただいたのに、お構いもしませんで」

「いえいえ、お気になさらず」

「それじゃまた月曜日にね。気をつけて」

「は～い。失礼しま～す」

残念ながら日本酒が天敵らしい田島くんは、自転車に乗ると長谷川理髪店を後にしたのであった。

。

しばらくして、三河屋の大久保さんがやってきた。

「こんばんは～」

「お、三河屋さん、早かったじゃないの」

「うん。俺がそわそわしてたもんだから、かみさんがね、早く行っといでって」

「そうかい」

大久保さんは手に信玄袋と風呂敷包みを提げている。

「あれ？ 何か持ってきたの？」

「うん。これ」

大久保さんがまず信玄袋から取り出したのは、利き酒用の大振りの猪口である。この信玄袋は長谷川さんの奥さんが作ったものだ。

「あ、そうか。さすがだねえ。蛇の目持参かい」

「そうなんだよ。マイ蛇の目。新しい酒を飲むときはこれがないとね。奥さんに作ってもらった信玄袋、こいつにぴったりなんだ」

「なるほど、そりゃよかった。そっちは？」

「これ、今度新しく仕入れた酒でさ、ちょっと試しに飲んでもらおうと思って」

大久保さんが風呂敷包みを持ち上げてみせる。

「そんな～気～遣わなくていいのに」

「いやいや、四合瓶だから。きっと長谷川さんの口にも合うと思うよ」

「そうなの？ 悪いねえ返って・・・今ウチも閉めちゃうからね。上がって待ってて。かあちゃ～ん、三河屋さんだよ」

長谷川さんが店の奥に声を掛けると、奥さんが顔を出した。

「いらっしゃ～い」

奥さんは大久保さんが手にしている信玄袋に気が付く。

「あ、それ、使ってくれてるの？」

「うん。こいつを入れるのにちょうどよくってね」

大久保さんが蛇の目を上げてみせる。

「あら、そりゃよかったわ。どうぞ、上がって」

「酒屋のくせに酒ご馳走になりに来ちゃった」

「たまにはいいじゃないの。何だかね、とってもいいお酒なんだって。こないだいただいたんだけど」

「それじゃ遠慮なく」

「どうぞどうぞ。そうだ・・・三河屋さん、ホームページとやらをどうとかって、何？」

長谷川さんが帰ってから奥さんにも報告したらしい。

「ああ、商店街のね。長谷川さんとこのも作るんですよ」

「そうなの？ ウチのにそんなことできるのかしら」

「手取り足取り教えるから任せといてよ。あ、奥さんにも覚えてもらわなきゃ」

「あたしに！？ まさか」

「いや、ぜひともお願いしたい」

「ええ～？ あたしもこのところ忙しいし」

「そうらしいね。それは分かってるけど、よろしく頼みますよ。お客さんも増えるかもしれないし」

「そうなの？ それじゃ、仕方ないわねえ。あ、ほら、上がってちょうだい」

「お邪魔します」

茶の間に通された大久保さんは卓袱台（ちゃぶだい）に蛇の目を載せて、長谷川さんが上がってくるのを待っている。

「お待たせ～」

店を閉めた長谷川さんが上がってきた。

「それじゃ早速」

長谷川さんは『飯出の春』の口を切ると、大久保さん持参の蛇の目に酒を注ぐ。トクトクトク・・・。大久保さんは蛇の目を手に持ち、色味を確かめる。

「まず色味を見る・・・。やや黄味がかってはいるがほぼ無色透明・・・」

次いで香りを試す。

「うん・・・いい香りだね。芳醇な、花のような・・・」

大久保さんが酒を少し口に含み、舌の上で転がしている。長谷川さんはその様子を固唾を呑ん

で見守っている。

「最初にやや甘味が来て、次に辛味……。コクとキレのバランスがいいね。香りも最初の芳香がつづく……。うん！ これはいい酒だ……。『春』って名がつくだけに、雪が解けて芽吹き始めた大地の息吹を感じるね……。いやあ、久しぶりにこれだけいい酒に出会ったよ。ちょっと鳥肌ものだね」

「そうかい！ そりゃあよかった！ やっぱりねえ、旨いと思ったんだよ。でも俺なんか素人だからね」

「こりゃあいいな。ぜひうちでも揃えさせてもらうよ。さっきのラベルにアドレスが書いてあったから、ホームページも覗いてみたんだ。早速明日にでも連絡してみるかな」

大久保さんが『飯出の春』の一升瓶を手に取り、撫でている。

「それとさ、こっちもあるんだけど、飲んでみるかい？」

長谷川さんが『多喜の舞』の一升瓶を取り出す。これも『飯出の春』と一緒に伝衛門さんから送られてきた酒だ。

「こっちはどっちかってえと女の人向きじゃないかな」

「へえ、これもおんなじ醸造所？」

「うん。一緒にいただいたんだけど……」

トクトクトク……。

「色味は……。ほとんど無色透明……。香りは……。リンゴに似てるな。フルーティーで華やかな香りだね」

「味はどう？ うちのかあちゃん、ほとんど酒は飲めないんだけどね。飲んだら金時の火事見舞いみたくなっちゃうってさ」

あははははは……。

「でも、両方ちびっと舐めてみて、こっちの方が好きだわなんて言ってたよ」

「そうか……。甘味と、軽い酸味……。辛味はほとんど感じないね。どちらかって言うと白ワインに近い味わいだ。冷酒向きだね。これもいいな。確かに女性向きかな……。へえ、『多喜の舞』か。名前もいいね」

「そうかい。これも人気が出るかな」

「多分ね。この頃は、女の子だけで飲む女子会なんてのが流行ってるらしいよ」

「あ、そういえばこの頃女子会って、よく聞くよね。それにしても、世の中変わったねえ。女だけで酒盛りなんて昔じゃ考えられないよ。小正月くらいなもんかな」

「ほんとだねえ……。さあて、それじゃ両方注文することにするかな。明日聞いてみよう」

「そうかい。そりゃ楽しみだ。これからいつでもいただけるってことだね」

「うん。そうだ、これも後で飲んでみてよ。新潟の酒なんだけど」

大久保さんが風呂敷包みを解いて酒を取り出す。

「そうかい？ 悪いねえ……。それじゃ親父に供えてからね」

大久保さんから酒を受け取った長谷川さん、あっと驚く。ラベルには何と『伝衛門』の文字。

「ええっ！？ これ、『伝衛門』っていうの！」

「そうだよ」

「へええ〜！ こんな名前の酒があるんだ。いやあ、こりゃあぜひ総帥にプレゼントしなきゃ」

「総帥？」

「うん。ほら、例の改装の件でお世話になってる人なの。じゃ、とりあえずこいつは親父に……」

長谷川さんが、やはり日本酒が好きだった先代が入っている仏壇に酒を供え、鈴（りん）を鳴らして手を合わせる。隣で大久保さんも居ずまいを正し、手を合わせている。

「親父さんも酒、好きだったよね」

「きっと喜んでるよ。ありがとうね」

「気風（きっぷ）のいい飲み方をする人だったよなあ……」

「うん。江戸っ子だったからねえ……」

長谷川さんは、竹を割ったような性格だった先代を思い出してしみじみしている。

「さてと。かあちゃ〜ん、もういいよ」

奥さんが台所から顔を出す。

「そうお？ それじゃ烏賊（いか）を炙るわ。それと蚕豆（そらまめ）ね」

長谷川さんの指示により、利き酒が終るまでは匂いの出るものを控えていたらしい。やがて、湯気の立つ皿を奥さんが持ってきた。

「はい、烏賊の一夜干し。あんた、お箸とお醤油出してね」

「はいよ」

おろし生姜を添えた炙りたての熱々の烏賊が、いい匂いの湯気を立てている。

「こりゃ旨そうだね。それじゃ早速……」

大久保さんが箸を伸ばす。

「ほふほふ……旨いねえ、この一夜干し」

「そりゃよかった。魚勝のだよ。三河屋さん、酒は爛につけるかい？」

「いや、このまま冷やでいいよ」

「じゃ、俺のだけぬる爛にしてもらおうかな。かあちゃ〜ん」

「なあに？」

「ちよいとこれ、徳利一本だけぬる爛につけてくれる？」

「はいよ。これも美味しいわよ」

つづいて出てきたのは、茹でたての蚕豆である。

「蚕豆も旨いよね」

長谷川さんも手を伸ばす。徳利を持ってきた奥さんも横に座って、自分用のお茶を淹れ、蚕豆を食べ始める。

「春の香りだわねえ……蚕豆って言えばね、面白い話があっさ」

「どんな話？」

「知り合いの奥さんが留守の間にね、ご近所から蚕豆が届いてたんだって。家庭菜園でいっぱい取れたからって。で、旦那が茹でといてあげようと思って、慣れないのに蚕豆茹でて待ってたら



しいの」

「へえ、マメな旦那だね。そらマメだわ」

これを聞いて奥さんと大久保さんが噴き出している。

「定年で家にいるようになってさ、ときどき何かやってくれるらしいの。でさ、奥さんが帰ってきたら蚕豆の匂いがするんだって」

「ああ、この匂いなあ。ちょっと、俺の足みたいなの」

「やだあ」

「それで？」

「それで、蚕豆茹でたのって聞いたのよ」

「そしたら？」

「旦那がね、うん。だけど何だかすご〜く増えちゃってさって言うんだって」

「蚕豆が？」

「増えるって、何で？」

長谷川さんと大久保さんが顔を見合わせる。

「奥さんが見たらね、蚕豆がさやごと茹でられてて、もう、こ〜んなに膨れちゃって！ お化けみたいになってたって！」

「蚕豆を！ さやごと！？」

あははははは……。一同大笑いである。蚕豆のさやの内側はスポンジのよう……。たっぷり水を含んで膨れること間違いなしである。

「あたしも長いこと生きてるけど、蚕豆をさやごと茹でたって初めて聞いたわ」

「でもさ、蚕豆をさやごと焼くとこれはまた旨いんだよ。さやが真っ黒焦げになるくらい焼いてね、剥いたら塩振って」

大久保さんが言う。

「そうなの？ それじゃ今度ウチでもやってみようかしら」

「ぜひお試しを。それだと中の皮ごと食べられるよ。ぜひウチの酒の肴に」

あはははははは……。

「……晋一も好きだったのよねえ、蚕豆」

奥さんがポツリと言う。

「そうだったなあ」

長谷川さんも、しみじみと蚕豆を噛みしめる。

「晋一くん、まだその後音沙汰ないの？」

長谷川さんから年賀状の一件を聞いていた大久保さんが尋ねる。

「ええっ？ あなた、三河屋さんに話したの？」

「あ、うん、こないだ、ちょこっとね」

「もう、人には言うなって言ったくせに」

奥さん、お冠だ。

「悪い悪い」

「あ、奥さん、大丈夫。誰にも言ってないからね、ご心配なく」

「内緒でお願いね」

奥さんが手を合わせる。

「分かってるって。で、どうなの？」

「あれっきり」

「年賀状一枚じゃ、調べようがないよ」

「でも、元気にしてるんだったらそのうち帰ってくるさ」

「だといいいんだけどねえ……」

座が沈黙したところで、大久保さんがふと近くに置いてあった怒髪のパスターに気付く。

「あ！　これがもしかして例の頭？」

「そうなの。すごいでしょ」

「へええ～長谷川さんが、こんな頭をねえ……う～ん、なかなかカッコイイじゃないの」

大久保さんが感慨深げにパスターを手にとってしげしげと眺める。

「世の中変わったねえ」

「でしょ。自分でもびっくりだよ」

奥さんは、ふと伝衛門さんの姿を思い出し、笑いを堪えるのに必死だ。口元を押さえて肩を震わせている。

「奥さん、どうかした？」

「いえいえ、ウチのがね、まさかこんな頭をねえ……」

ごまかしている。

「ほんとだよ。これ、よく描けてるけど、誰が描いたの？　プロのイラストレーター？」

「いやいや、区役所の田島さんって人に描いてもらったの」

「へえ！　上手いねその人」

「でしょ？　もう、ウチのお客さん見て描いたみたいなの。あ、でも顔は田島さんかな？」

「へええ～。『爆発Hair』か……このコピーもいいじゃない」

「コピー？　これ、コピーじゃないよ」

「いや、このキャッチフレーズがさ……。そうだ！　その人にいろんな髪型のイラスト描いてもらって、ホームページに載せようよ」

「あ、そりゃいいや。もう一枚描いてくれるって言ってたけど、もっと頼んでみるか」

「それ見てお客さん、増えるといいねえ」

「そう願いたいねえ」

あははははは……。

「今、天ぷらも揚げるわね」

奥さんが立ち上がる。

「あ、奥さん、お構いなく」

「ううん、もう下拵えしてあるから揚げるだけなの。今日はね、魚勝で鱧（キス）のいいのが入ったからって。あと、独活（うど）に、桜海老と新玉ねぎのかき揚げね」

「あ、旨そうだなあ。大久保さん、ゆっくりしてきなよ」

「悪いねえ」

「いいじゃないの、たまには」

「じゃご馳走になるか」

「それじゃちょっと待っててね」

「はいよ」

奥さんは天ぷらを揚げに台所へ消えた。

「そう言えばさ、さっき、何か言いかけなかった？」

大久保さんが尋ねる。

「何か？ いつだっけ？」

「ほら、店にいて他のお客さんが来たとき」

「ええ？ そうだっけ？ 何の話だったかな……」

「店の改装の話でさ……」

「ええっと……何だっけか……」

長谷川さん、腕を組んで暫く考えていたが、思い出したらしく、はたと膝を打つ。

「そうだ！ 店の名前だ」

「名前？」

「うん。この際だから名前も変えようと思ってさ」

「変えるの？ 何て？」

「ばーばーはせがわ」

「何と！ バーバーかい」

すると、奥さんが台所から顔を出した。

「ちょっと！ それあたしのこと！？ な～んてね」

あははははは……。

「はい。揚げたてをどうぞ」

奥さんが、からりと揚がった独活の天ぷらを運んできた。

くぬぎ台駅前商店街では今、ネットスーパーの立ち上げに向けて動いている。その中心となっているのは、商店会の会長を務める三河屋の大久保さんだ。商店街の各店舗で少しずつ資金を出し合っ、空き店舗を拠点にしたくぬぎ台団地限定の宅配サービスを始めるのだ。

大久保さんは辰巳堂やマルセイ、森田屋など主だった商店と協力して、このたびくぬぎ台駅前商店街の共同ホームページを開設したところだ。そこから話が発展して、ネットスーパーの立ち上げとなったのである。それというのも、くぬぎ台団地のお年寄りから、買い物に困っているという声が多く寄せられるようになっていたからだ。いわゆる『買い物弱者』の発生である。

くぬぎ台団地は、四十年ほど前に建てられた大規模団地で、建設当初は若い人や子どもで溢れていたのだが、今では若い人がほとんどいなくなって老人団地のようになっている。四階建ての建物にはエレベータもなく、人口は減る一方だ。

以前は団地の横で大型スーパーが営業していたのだが、人口の減少に伴って『不採算店舗』となり、数年前に撤退してしまっている。買い物は商店街を頼るしかないのだ。いくら区が運営する地域循環小型バスの『ぐるっとバス』があるといっても、バス停から自宅までは、老人としてはかなりの距離を歩かねばならない。増してや上層階の住人は、階段を使って重い荷物を自分で上まで運ばなくてはならないから大変なのだ。こういうときは、平地では老人の味方であるシルバーカーの重さも恨めしくなる。

ネットスーパーでは、生鮮食品から生活雑貨まで、くぬぎ台駅前商店街で取り扱っているものを購入することができる。各商店では、当日朝十時までにその日に販売できるものをネットスーパーにアップする。購入者は正午までにネット上で買い物をし、当日午後三時には自治会の集会所に配達される仕組みだ。その際には注文外の商品も積み込んで、現地で販売もする。自宅にパソコンがない家庭が多いと思われるので、希望者は集会所のパソコンから購入の申し込みをする。集会所に人を呼び寄せようという作戦だ。運営には自治会の理事さんたちが協力して当ってくれる。中でも比較的若手の理事さんたちは、集会所から各家庭までの配達にも協力しようと申し出てくれた。集会所は、ずらりと扇形に並んだ団地の要（かなめ）の部分にあるので、こういう場合にも好都合である。とりあえず、毎週火曜日と金曜日の二日間、試験的に運用することで話が纏まった。順調に行けば規模を拡大して運用する予定となっている。

そんな話が進む中で、俄然頭角を現したのが魚勝の潤ちゃんである。例の、刺身のツマをスライサーで切っていた小僧さんだが、この潤ちゃん、最近の若者だけあってパソコンとともに育っている世代である。ああ見えてパソコンには精通しているらしい。親父さんでは出番がないところだが、代わりに大久保さんに協力して走り回っているのである。それだけではない。トンとインターネットなどに縁がない一部の商店街の住人たちにパソコンの使い方の指導も行っている上に、今後始まる配達の仕事までも買って出ている。今や、くぬぎ台駅前商店街になくはない存在となっているのだ。

「へええ・・・あの潤ちゃんがねえ」

自慢の包丁を研いでいる魚勝の親父さんから話を聞いて、長谷川さんの奥さんがびっくりしている。

「そうなんだよ。俺もねえ、親戚から頼まれて預ってはみたものの、こいつ何の取り柄もなくしてどうしたもんかと思ってただけだね。朝はパンだ。茶は飲まねえ、コーシーだなんぞと抜かしやがる。うるせえ、ウチの朝飯は納豆に焼き魚に味噌汁と昔っから決まってるんだって無理矢理食わせたらばさ、今じゃあ、やばいやばいって三杯飯よ」

「ちょっと、やばいって何よ」

「いやあこの頃のガキはさ、旨いってことをやばいとか言うんだってよ」

「へええ～そうなの！ 驚いた」

「全くだよなあ。で、飯は人並み以上に食いやがるくせに大根のかつらむきはできねえと来た。指ばっか切ってやがるから、合羽橋にスライサーなんぞ探しに行かなきゃなんねえし……。だけど今度の一件でさ、ところを得たってえのかな。人間、どっかしらいいところはあるもんだね。今じゃ俺の師匠ってとこだ」

あははははは……。

「だけどなあ、不思議なもんだね。あんな箸にも棒にも引っかかんねえような奴がさ、こんとこ店の仕事にも精出すようになってさあ。この前なんかさ、人の前で正座しやがるから何かと思ったら、おやっさん、かつらむきを一から教えてくださいだとも。びっくり魂消たよ」

「あらまあ、よかったじゃないの。人間、やる気が出ると違うわねえ」

「ほんとだよ」

魚勝の親父さんも潤ちゃんをすっかり見直したようである。親父さん、今は柳刃包丁を研いでいる。

「ウチの奴もさあ、宅配用に少人数向けの新しいお惣菜を開発するんだって、張り切ってるよ」

「おかみさんの煮物は絶品だものねえ。お年寄りなんかほんと助かるわよきつと」

「だといいいね。こちとらますます忙しくならあ」

あははははは……。

「まあ、宅配じゃウチは関係ないけどね」

「そうだねえ。床屋は配達はしねえよな。散髪一丁ってか？」

あははははは……。

「昔はなあ、御用聞きに何って注文取るのが当り前だったけど、それが違った形になったってことかね」

「あ、そうか、なるほどねえ。そうそう、昔はみんな御用聞きに回ってたわよね」

「そうだよ。俺の若い頃なんか御用聞きに走り回ったもんだ。スーパーなんかができるようになってからだな、ガラッと変わっちゃったのは」

「ほんとにねえ……そのスーパーがなくなって、また昔に戻ったってことかしら」

「かもしんないねえ、違った形でなあ……ところでお宅の改装の話、どうなった？」

「ああ、それぞれ。何だかうまく行ってるらしいわよ。何でも、八月のお盆休みのときに合わせて工事してくれるんだって」

「お盆休みじゃ、職人さんが集まんないんじゃないの？」

親父さん、仕上げ砥をかけた柳刃包丁をかざして指を当て、研ぎ具合を確かめる。納得したようにうなずくと、つづいて出刃包丁だ。

「それが何とかしてくれるらしいのよ」

「そうかい。そりゃよかったね。楽しみだねえどんな店になるのか。それよかさあ、晋一くんが床屋の修行してるっての、ほんとなの？」

親父さんが、声を潜めて言う。

「ええっ？　ウチのが何か言ってた？」

「いやこないださ、俺んところで将棋指してるときにポロッとそんなこと言ってたもんだから」

長谷川さん、またまたここでも晋一くんのことをしゃべっていたらしい。

「もう、どうだかまだ分からないから人様には内緒だって言ってたのに、ウチのったら……。実はね、今年のお正月にね、住所も何にも書いてない年賀状寄越してさ……。それに何て書いてあったと思う？」

「へえ、年賀状をねえ。さあて……。謹賀新年とか？」

「それがさ、たったの三文字。『修行中』って。それ見てウチのが、床屋の修行をしてるに違いないって」

「そうか……。ほんとなんだな」

「でもねえ、年賀状だから消印がないし、どこでどうしているのやら。修行たって、ほんとに床屋の修行だかどうだか……。音楽で身を立てるって出てったんだから」

「いやあ、そうに違いねえよ、きっと。でなきゃこんなに年月が経ってからわざわざそんな年賀状寄越すもんかい」

「ウチのもそう言ってるんだけど、ほんとにそうかしらねえ……。だといいいんだけど」

長谷川さんの奥さん、ちょっと涙ぐんでいる。

「店もきれいになった上に晋一くんが帰ってくるとなりゃ、もう鬼に金棒じゃないの。大丈夫、きっと帰ってくるさね」

親父さん、ニコニコしながら研ぎあがった出刃包丁をの仕上がり確かめている。

「ありがと。もう、信じて待つしかないわね」

「果報は寝て待ってな。まあ、気長に構えて待つことだね」

「ウチはあのおり能天気なもんだから、あと二十年くらいは頑張るんだってますます張り切っちゃってるわ」

「俺んところなんぞ、娘が二人とも嫁に行っちゃったからなあ。潤の奴でも後を継いでくれりゃあ御の字なんだけどね」

「潤ちゃんも、大化けするかもしれないわよ」

「最初は、こりゃダメだなと思ったっけが、近頃はちょっと希望の光が見えてきた感じだよ」

あははははは……。

「希望の光って言えば、ウチも近頃じゃ若いお客さん増えてるしね」

「そうなんだってね。こないださ、俺も頭刈ってもらいに行ったら、こーんな頭の若いのが来て

たから驚いちゃったよ」

出刃包丁をまな板の上に置いた親父さんが、怒髪を両手で再現する。

「そうなのよ。この頃そんなのがいっぱい来るの」

「俺が座って待ってたら隣に来てさ、携帯いじってるから見るともなしに見てたら、『とこやなう』とか打ってた。ひらがなで。何だろあれ」

「とこやなう？ 何だろうね。『とこや』は『床屋』だろうけど」

長谷川さんの奥さんが持っているのは、老人向けのお助けフォンである。これも、森田屋のお嬢さんに命じられてつい最近使うようになったものだ。メールもできる機種だが、使い道はもちろん電話専用である。ツイッターどころかメールも打ったことのない奥さんには想像もつかない。

「近頃の若い奴にゃ日本語も通じないからなあ。それにしても長谷川さんここにあんな若いのがなあ・・・表にもイカしたポスターなんぞ貼っちまってさあ」

魚勝、感慨深げである。

「そうなのよ、驚いたでしょ。ウチのが一番驚いてるわ」

あはははははははは・・・二人で大笑いだ。そこへ別のお客さんがやってきた。

「らっしゃ〜い！ 奥さん、今日は鰹がおススメだよ」

「あ、それじゃまたね」

「おう！ またね。あいつによろしく」

「は〜い」

それから暫く経ったある日。こちらはくぬぎ台小学校の空き教室である。『学童しにあくらぶ』の運営も順調で、老人と子どもたちは和気藹々（あいあい）と楽しい時間を過ごしている。将棋、手品、腹話術、竹とんぼ、唱歌、鉤針編み、剣玉、折り紙等々、子どもたちもだんだん腕を上げつつあるようだ。今日は久し振りに講師の面々が集まったの作戦会議が開かれている。

「何？ くぬぎの里慰問団だあ？」

うるさ型の山田さんが、早速田島くんに文句をつけている。『くぬぎの里』というのは、区が運営する老人福祉施設である。『しにあくらぶ』の老人と子どもたちで慰問団を結成し、『くぬぎの里』を訪問したいというのが、田島くんの提案である。

「そうなんです。時期としては秋ごろを考えているんですが・・・」

「けどよ、あそこに入ってる年寄りって、俺らと年、変わんねえんじゃねえの？ 年寄りが年寄りを慰問するってなあどうなんでえ・・・なあミッチー」

竹とんぼ担当の山田さんが、隣に座った折り紙担当のミチコさんに話を振る。

「そうねえ・・・何だか照れくさい気もするわよねえ。子どもたちが行く分にはいいんじゃない？」

そこへかっちゃんが口を挟む。

「あの、田島さん。その慰問団って、何か発表会みたいの、するわけ？」

「そうです。前にヤマモトさんがおっしゃってましたよね。できたらいいのにとって」  
「そうなんだけど、あれって、ウチのお嫁さんが見てみたいって言ってたからなのよ」  
「あ、そうだったんですか」

かっちゃん、マンションに息子夫婦と住んでいる。以前は、正社員だった嫁のサチコさんに代わって家事一切を引き受けていたかっちゃんだが、サチコさんがパート勤務になり今や家事はすべてサチコさん任せである。顔を突きあわせる時間も増えてぶつかることも多かった二人だが、かっちゃんが『しにあくらぶ』の講師を引き受けてからというもの、最近ではサチコさんも何かと応援してくれている。そんなサチコさんに、『しにあくらぶ』の活動を見てみたい、発表会なんかやらないのかしら・・・と言われたことがきっかけで、かっちゃんが前に田島くに提案してみたのだった。

「そう。普通の人も見に行っているの」  
「う～ん・・・入所者の家族の方とかも見えるでしょうしね。どうかな・・・あそこには結構広いホールがあるんで、多分大丈夫だと思うんですが。ちょっと施設長にも相談してみましよう」  
「そうしてちょうだい。お願い」  
「了解です。で、その慰問団なんですけど、皆さんのようにお元気な方たちと子どもたちに接することによって、入所者の方にもいい影響があるんじゃないかということで・・・」  
「なるほどねえ、そういうこともあるかしら」  
「私はよろしいんじゃないかと思えますよ」  
腹話術担当の榎本さんが言う。

榎本さんの『しにあくらぶ』での通称は『いたりあぐみ』という。榎本さんは民間企業を定年退職した『リタイア組』だが、山田さんはそれを聞いて『イタリア組』だと思ってしまった。これが大ウケで、以来榎本さん自身『いたりあぐみ』を名乗っている。榎本さんが通称を『いたりあぐみ』に決めた際の二人の会話は以下のとおりである。

「私は『いたりあぐみ』でお願いします。ひらがなで」  
「名づけ親は俺だな」  
「ありがとうございます」  
「なあに、いいってことよ」  
一同爆笑。

「いいんじゃない？ 私もいいと思いま～す」  
鉤針編み担当のトモヨさんは賛成のようだ。  
「子どもたちと一緒にっていうのがいいと思うわ」  
剣玉担当のカズコさんも賛成である。



「人様の前で成果を発表できる機会ってなかなかないですからね。僕も賛成です」

手品担当の井上さんも、腕の見せ所とニコニコしている。

「ありがとうございます。子どもたちの保護者にも意見をうかがってみますので……」

「ちょいといいかい田島さん」

「はい、長谷川さん」

「慰問ってえと、やっぱり日曜日かなんか？」

「そうですね……まだあちらにも打診中で、具体的に何日と決めてるわけじゃないんですが、九月の敬老の日の前後くらいで考えてみようと思ってます。子どもたちも一緒なんで、多分やるとしたら土、日か祝日ですね」

「そうか、やっぱりね」

「あ、そうか。長谷川さん、日曜はお仕事ですよ」

「いや、一日くらい何とかなるよ」

「申し訳ありません」

「それに、もしかしたら、息子が帰ってくる、かも、しれないし……」

長谷川さんが小さな声で言う。

実は近頃長谷川理髪店に、ときどき無言電話が掛かってくる。出ると、しばらくこちらの声を聞いてから切れてしまうのだが、長谷川さんは絶対晋一くんからだと言い張って譲らない。

「久し振りだもの、何てしゃべったらいいか分かんないんだろ」

またまた希望的観測だが……。

「そうかしら。単なるいたずらじゃないの？」

「いや実はさ、こないだ、こっそり店を覗いてる若いのがいたんだよ。あれは晋一だったんじゃないかと俺は睨んでる」

「いやだ！ 気を付けてよ。オレオレ詐欺の下見かもしれないし」

奥さんは半信半疑である。

「オレオレ詐欺なら、もっと金のありそうな店を狙うだろ」

「それもそうだけど……」

「背格好もちょうど晋一くらいだったんだ」

「あんた、晋一が出てってから何年経ってると思う？」

「分かるさ、息子だもの。あの年でもう背も伸びないだろ？」

「う～ん……確かにねえ」

奥さんは、あんまり期待しすぎて裏切られるのが怖いのだ。

「ええっ！？ 何だって？ 長谷川さんよ、またどうして。晋一、出てったっきりだって言ってなかったか？」

これを聞きとがめた山田さんが驚いている。

「いや、これはまだご隠居には言ってなかったんだけど、実は今年の正月にね、『修行中』って

だけ書いた年賀状が来たもんで……もしかしたら、どっかで床屋の修行をしてるんじゃないかなあ、なんて……思うんで……」

奥さんの前では大見得を切っていた長谷川さんだが、晋一くんをかわいがってくれた山田さんをガツカリさせるのも……。確信がないだけに、ちょっと弱気の発言だ。

「そうかい！ 晋一の奴、どっかで元気に床屋の修行してたのか！ 長谷川さんよ、よかったじゃねえか！ ……そうかい、そうかい……」

晋一くんが小さい頃には、よく肩車をして遊んでやった山田さんである。早くも晋一くんが床屋になった姿を想像し、感極まって涙している。

「いやいやまだはっきりと決まったわけじゃないんで……。でもねえ、ウチの奴はどうだか分からないって言うんだけど、俺はどうもそうじゃないかと睨んでるんで」

「そいつあ何よりだ。店も新しくなるってえし、これで晋一が帰ってくりゃ、長谷川理髪店も安泰だな」

「ほんとにねえ。帰ってきてくれるといいわね」

「きっと帰ってきますよ」

「そうそう」

期せずして一同から拍手が起こる。

「ありがとうございます。だといいんですが……。あ、改装の件では、総帥にすっかりお世話になっちゃって。総帥、ありがとうございます」

「ハテ、何のことですか？ 我輩は何もしておりませんぞ」

「また～冗談ばかり」

「ふっふっふ」

とぼけながらも伝衛門さん、ニコニコと嬉しそうである。

「それから、店の名前も今度は平仮名で『ばーばーはせがわ』になりますんで、皆さんひとつよろしく」

「おお、そうかい。名前まで新しくなるのか。『ばーばー』ってえと、英語だな？」

山田さん、実は英語が大の苦手である。

「お！ よく知ってるねえ」

「そのくれえはな」

山田さん、太い腕を組んでちょっと胸を張る。

「さすがだねえ！ それからオマケににね、床屋の出前まで始まりそうなんで」

「あ、聞いたぜ。商店街の、何てったっけ？ 何とかスーパーな。あそっからリクエストが来たんだってな」

「お、リクエストと来たか。これまた英語だね」

「へっへっへっ、俺も近頃英語が得意になってきたぜ」

一同爆笑。

「そのスーパーでさ、床屋の出前もやって欲しいんだって」

「ははあ、なるほどな」

「だから曜日を決めて、出前の日にしようかと思ってるんで。何だか忙しくなりそうですよ」  
長谷川さん、ニコニコと嬉しそうだ。

「俺もな、及ばずながらその何とかスーパーに協力させてもらう」

「山田さんも？ 畳替えかい？」

「いや、配達のみ」

「ええっ？ 配達は確か魚勝の小僧がやるって聞いたけどね」

「あいつが行けねえときもあんだろ。そんなとき俺様の出番ってわけよ。木曜の午後以外（いげえ）はな」

山田さんの『しにあくらぶ』担当日は、木曜の午後である。

「へええ！ すごいねえ山田さんも！」

「あたりきよ」

山田さん、腕を組んでご満悦の表情。

「何しろオート三輪の時代から乗ってんだ。これまで五十年以上無事故無違反。すげえだろ。俺の免許、知ってっか？ シルバーじゃねえぜ。何と、ゴールドだぜ！」

「おお！ またまた英語だね！」

「おうよ。これからは英語の師匠と呼んでくれや」

一同大爆笑。

「でも、スーパーは今んとこ火曜と金曜だっけ聞いてたっけが」

「なあに、評判が良けりゃ毎日（まいんち）やるって話だぜ」

「そうかい」

「助かるわあ。今から楽しみなの。ウチなんか四階でしょ。重いものなんか買ってくると、もうヒイヒイ。今度は上まで運んでくれるって言うし。でも運転には気をつけてよね。団地の中、結構一方通行とか多いから。年寄りが多いし」

団地に住んでいるトモヨさんが言う。

「任しとけ。実はこの前魚勝の小僧と偵察に行ってた。もう、一通とか全部地図に書いてあらあ」

「さすがだ。ぬかりがないねえ！」

「おうよ。俺様を誰だと思ってる」

「知ってるわよ。山田畳店のご隠居様でしょ？」

かっちゃんが茶茶を入れる。

「暴走老人なんて言われぬように、安全運転でお願いね！」

「ちえっ！ 分かってるよ」

一同爆笑。

「でも、そうすると、団地の人たちはあんまり団地の外に出なくなっちゃうってことかしら」

「それぞれ、そこよ」

山田さんが大きく頷く。

「ええ？」

「三河屋さんがそのあたり、何だか考えてるらしいぜ」

「そうなの。何だろうね」

「まああの人の考えるこった。ぬかりはねえと思うぜ」

「へえ～、何かしら。そっちも楽しみねえ」

あははははは・・・。

「実は、僕の店にも、リクエストが、来てまして・・・」

座が静まってから、写真館の井上さんがおずおずと表明する。

「井上さんとも？ 写真撮ってくれってか？」

「そうなんです。それも、遺影を撮影して欲しいって・・・」

「何？ いえいだと？」

遺影と聞いて、教室が一瞬静まり返る。

「いえ～い！」

長谷川さんが最近覚えた若者言葉で叫んでみたが、残念ながらこれはウケなかった。尚も教室が静まり返る。

「いえってえともしかしてあの、葬式んときの写真かい・・・」

山田さんが恐る恐る尋ねる。

「そう。この頃ね、あちこちで、生前の元気なときに遺影写真を撮っておくっていうのが流行ってるんですよ。それで僕のところでも、商店街のホームページに掲載してみたんです。そうしたらすごい反響があって・・・」

「あ、聞いたことあるわ。前に、テレビドラマでもあったわよね、そういうの」

カズコさんが応じる。

「どうしてもお葬式のときの写真って、間に合わせのスナップ写真とか、結婚式に呼ばれたときの写真とかになっちゃうから、その人らしく生き生きとした写真で送ってもらいたいって」

「そうなんです。それで、撮って欲しいっていう依頼が続々と・・・」

「そうかい。なるほどなあ・・・。年寄り第一写真なんぞ撮りたがねえからな、俺なんかもここ何年も撮ったことがねえや。それじゃあ俺らもひとつ、井上さんに頼んでいい写真、撮ってもらうか」

「賛成！ いいと思いま～す」

トモヨさんが手を上げる。

「そうよね、私なんかいつお迎えが来てもおかしくない年だもの」

かっちゃんも言う。それを聞いた山田さん曰く。

「冗談言っちゃいけねえや。ヤマモトさんなんか、あと三十年くれえは大丈夫（でえじょうぶ）だぜ」

「三十年！？」

かっちゃんがびっくりしている。

「おうよ。憎まれっ子世にはばかるってな。へっへっへ」

「あ～！ 言ったわね！ そしたら山田さんなんかあと五十年よ」

「何を!？」

「まあまあまああ」

井上さんが間に入って場を収める。

「そしたら今度ぜひ機会を作りましょう」

一同から拍手が起こる。そこまで黙って聞いていた田島くん、いろいろな話が進んでいることに驚いている。

「そんな話が進んでいるんですか! 皆さんすごいですね!」

「おうよ。年寄りを見くびっちゃいけねえぜ」

一同爆笑。

「商店街の何とかスーパーっていうのは？」

「あ、ネットスーパーです。くぬぎ台団地向けの。あの、隣駅に移ってきた東京平成大学、ご存じですよ」

井上さんが言う。

「はい」

「あそこの社会学科の教授が、商店会の会長と知り合いでね。電子マネーなんかの社会実験も兼ねて協力してくれることになったらしいです」

「そうなんですか。いろいろと進んでるんだ」

「これからは老人が増える一方ですからね、元気な老人は社会貢献しないと」

「ほんとねえ。年金貰ってるだけが能じゃないわよね」

「次はあれだ、くぬぎ台団地を何とかしなきゃあなあ……」

山田さんが腕を組んだまま眉を曇らせる。

「そうそう、それが問題なのよ」

団地に住んでいるトモヨさんにとっては他人事ではない。

「聞いた聞いた。また孤独死が出たんだってねえ」

「そうなのよ。空き家は増える一方だし、そうなる目も行き届かないでしょ。だから発見が遅れたって……私なんか明日はわが身だもの」

トモヨさんは数年前に伴侶を亡くし、一人暮らしである。三人いる子どもたちも遠くでそれぞれの生活を営んでいるのだ。一緒に暮らそうと言ってくれる子もいる。それはありがたいが、住み慣れたこの町を離れる気になれないのだ。一人で生活できるうちはここで暮らしたいと思っている。

「こうなったらほっとけないわよね。我々老人も何かできないかしら」

「よし、ひとつ我々くぬぎ台駅前商店街も一肌脱ぎますか」

「いいわね! 私は商店街の人間じゃないけど、協力させてもらうわ」

「おう、そう言ってもらえると百人力だな」

「任せといて」

「よし、くぬぎ台駅前商店街とその他もろもろ、前へ～進め!」

「おう!」

あははははは・・・。

果たして、長谷川理髪店の晋一くんは帰ってくるのか？ 三河屋の大久保さんの企んでいる面白いこととは？ くぬぎ台団地はどうなるのか？ まだまだ目が離せないこの先である。

この本は、2011年に文芸社より発行した『くぬぎ山ものがたり』の姉妹編です。『くぬぎ山ものがたり』で活躍した一部の人が登場します。この先もくぬぎ山をめぐる人たちのものがたりを書き継いでいきたいと思っています。

## くぬぎ台駅前商店街

<http://p.booklog.jp/book/62817>

著者：姫烏頭

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/hoosinsi/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/62817>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/62817>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ